平成二十九年度　第百二十回

京都大学書道部

冬樟展

日時　平成二十九年　十二月十六日・十七日
　　十時～十七時
　　（十八日は受付十六時まで）

場所　建仁寺
　　西来院・禅居庵

―巻頭に寄せて―

山の木々は色づいた葉を落とし、道ゆく人々は背を丸め、足取りは速い。朝になれば地面に霜が降り、夜、ふと見上げれば澄み渡った空にオリオン座が輝く、そんな季節。

冬である。

京都大学書道部にとって何度目の冬だろうか。今回の冬樟展で学外書展は通算百二十回目を迎える。書道部では年に二回の学外書展を行っているから、単純計算で今年の冬は六十回目ということになる。おそらく書道部の設立から数年後に初めての書展を開いているだろうから、実際はもう少し多いだろう。

「冬」という言葉の由来は諸説あるが、その中の一説によれば、「増ゆ、殖ゆ（増えるの意）」が転じて「冬」となったという。京都大学書道部も六十年を超える長い歴史の中で部員数を増やし、大きな団体へと成長してきた。

今回の冬樟展では八十を優に超える数の作品が建仁寺西来院・禅居庵に所狭しと並び、その様は大きな団体へと成長してきた私たち書道部を象徴するようである。出展作は正統派の古典臨書作品から、個性的で表現力豊かな創作作品まで多種多様であり、見応えのあるものとなっているはずだ。部員一人一人の創意工夫と作品に対する熱意をご覧いただきたい。

今年の六月末に幹部が交代し、新体制となってから初めての書展となる今回、今日まで先輩方をはじめ、多くの方々にご支援とご協力を賜った。また、無事に今日のこの日を迎えることができるのも、顧問の宇佐美文理教授、行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生のおかげである。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

末筆ながら、第百二十回京都大学書道部冬樟展に本日来ていただいた皆様に感謝の意を表したい。心ゆくまでゆっくりと書展全体を楽しんでいただけたら幸いである。

平成二十九年十二月吉日

京都大学書道部　部長　中村勇真

十年前の書道部

行友　三輪子（書道部 OG・京都大学人文科学研究所図書掛主任）

今年度より、元書道部員として顧問の末席に加えていただいた行友（ゆきとも）と申します。私が書道部にいたのは、約十年前。自己紹介を兼ねて、当時のことを記します。

私は幼稚園から習字教室に通っていましたが、書道部には入らないと決めていました。書道は個人プレーなので、サークルに入る意義はないと思ったのです。

しかし新歓で冷やかし程度に書道部ブースをのぞいたとき、素敵な笑顔の先輩が気さくに話しかけてくれました。お菓子をもらって部室まで付いて行くと、個性的な先輩揃いで、且みなさん楽しそうで、結局そのまま居付いてしまいました。

二回生になると、副部長と会計を兼任しました。部長は皆を優しく包みこむお兄さん。副部長はダメ出し担当の怖い人。という役割分担になんとなく落ち着きました（※もともと怖い性格なわけではありません）。人にダメ出しするには、練習量も技術も人より上でなければならないわけで、自分が頑張るきっかけにもなりました。

私は習字歴が長いだけで、一般的な整った字しか書けません。臨書を通じて倪元璐と趙之謙が好きになり、創作では他の部員の独創性に刺激を受けました。

合作やパフォーマンスは別として、やはり書道は個人プレーです。しかし、書道部に入る意義はありました。仲間と書道の楽しさや苦しさを分かち合えること。師やライバルに出会い、腕を磨けること。人が集まるともちろん厄介事も起こりますが、当時の部員たちは今でも大切な友人です。

昨年、京大書道部 OB 展が初開催されました。三十ほど年の離れた大先輩方に初めてお目にかかり、和やかな時間を過ごさせていただきました。書道部のゆるくて楽しい雰囲気は、創部当時から今に至るまで、変わらず受け継がれているのではないかと思います。

末筆となりましたが、京大書道部のますますの発展をお祈り申し上げます。

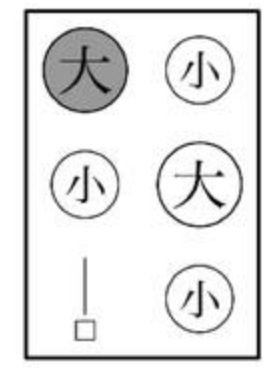
部屋に飾る作品（二）

寺本　蒼玄（京都大学書道部　技術顧問）

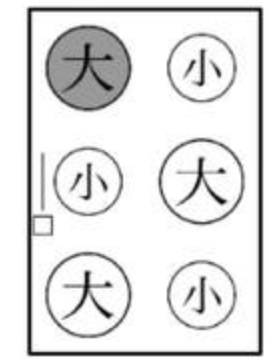
前回に続いて、五字句、六字句の作品について、縦書、横書により、中心となる「ヤマ場」の個所は変化します。縦、横作品の三行作品の場合、二行目の一字、二字目がヤマ場となります。

縦形式の場合（四字目がヤマ場となります）

【例】

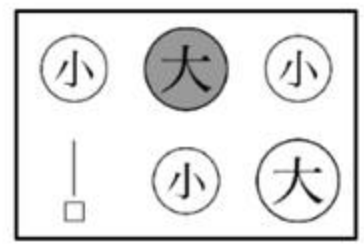




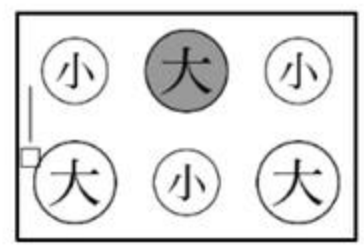


横形式の場合（三字目がヤマ場となります）

【例】







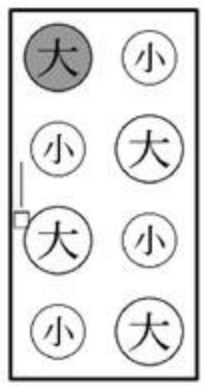
次に七字句、八字句の作品について、この場合も縦書、横書により変化します。

縦形式の場合（五字目がヤマ場となります）

【例】



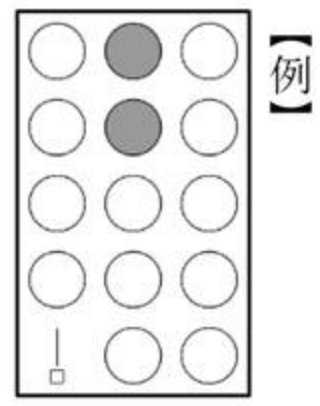






横形式の場合（四字目がヤマ場となります）

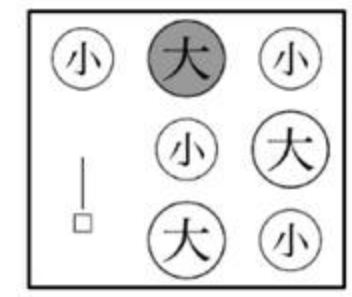
【例】



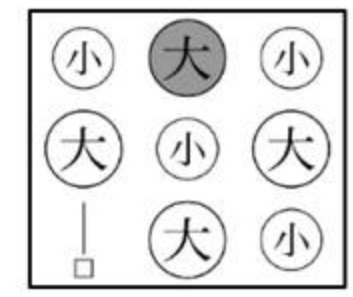


以下小作品に書く字数で十字以上は、行数が三行、四行となり、ヤマ場の場所も変化します。縦、横作品の三行作品の場合、二行目の一字、二字目がヤマ場となります。

【例】









横になると四行作品となり、二ヶ所のヤマ場が考えられます。二行目の一字目、三行目の二字目にヤマ場を作ると良いと思われます。

【例】



以下字数が二十字を越える作品になれば、字も小さくなり、大きなヤマ場は作らず、少しの変化と潤渇の変化で対応して書いてみて下さい。

学生の間に作品の作り方の基礎を勉強して、好きな古典を選び、その特徴を取り入れて、書展への出品をしていって下さい。

臨書と創作

○臨書

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは、古典の字形や用筆に迫ろうとする、「形臨」と呼ばれるものです。形をまねることは、その古典に迫る最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われ、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップとなります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品から学ぶことを基盤としています。書道における基本と呼べるものが、臨書なのです。

○創作

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句や詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の主張や個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られる様々な表現方法を用いることで、作品に味わいや深みを出すことが出来るようになります。

○法帖

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本をとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の冬樟展では、各臨書作品の右横に臨書した箇所の法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしています。

作品鑑賞の参考に、こちらも是非ご覧ください。

書体について



『篆書』
漢字のもっとも古い形で、現在使われている漢字のもとになった字体です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。均一な太さの線が特徴です。



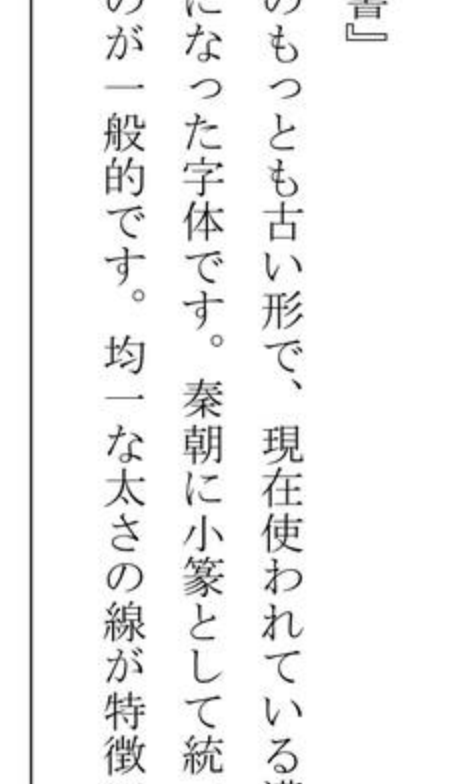
『隷書』
役人が複雑な字形だった篆書を早書きした際生まれた字体です。字形は横長で、時代が進むにつれ、線の終わりに独特な「波磔」がみられるようになります。



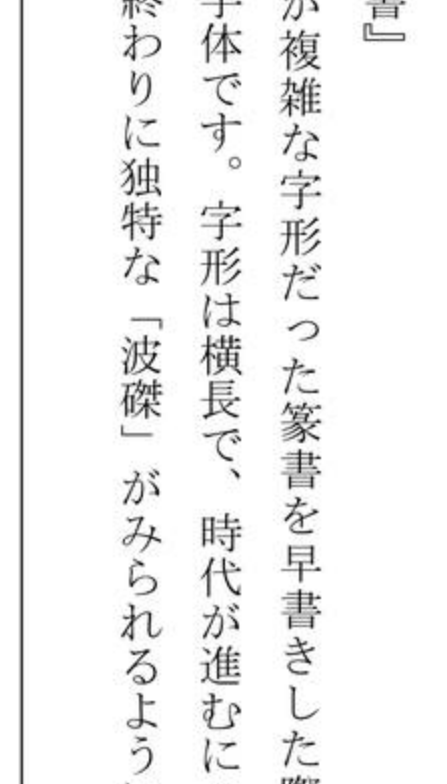
『楷書』
隷書からさらに記号化された、バランスの取れた字体です。その整った字形から、現在の漢字の基本とされています。



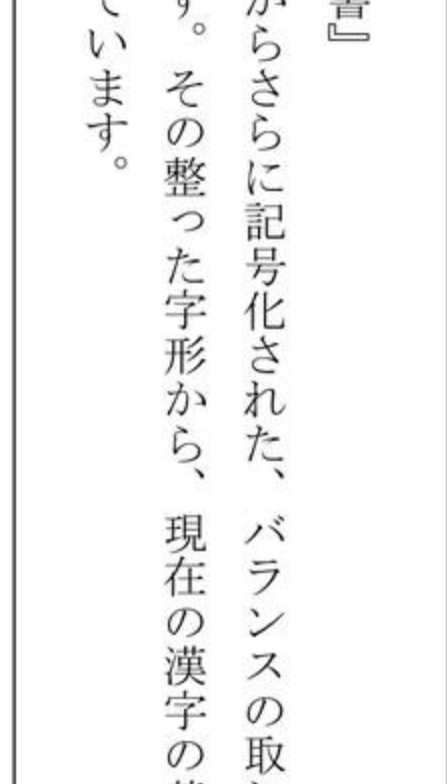
『行書』
隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や点画の流れが最も重視される書体といえます。



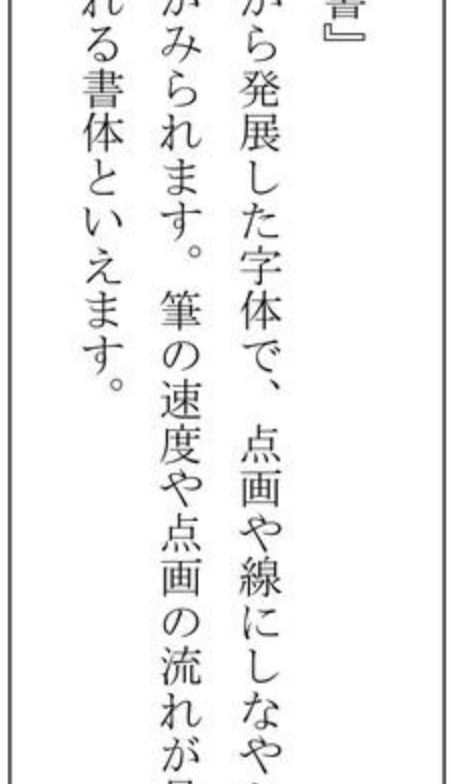
『草書』
隷書を早書きすることから発展しました。線の省略や筆順に変化があり、自由度の高い作品となります。文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。



『かな』
日本独特の表音文字です。草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。



『調和体』
日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものです。漢字かな交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。



書家説明集

文責：平井達也

➢ 王羲之（303?～361? 【晋】）

書道史上、最大の知名度を誇る人です。楷書・行書・草書を体系的に整理し、書を芸術の域に高めたがゆえに「書聖」と仰がれました。他の書家の説明の中で「王羲之」という言葉が多用されることからもその影響力がうかがい知れます。作品は草書が多く、特に友人あての書状である**『十七帖』**（臨：覚道、大橋）は古くから習字の典範とされ、「書中の龍なり」と評されました。

✓ その他の臨書作品：中林『集字聖教序』、小野『興福寺断碑』

➢ 欧陽詢（557～641 【唐】）

王羲之から強く影響を受けた唐の四大家の一人です。彼はどのような書体でも巧みに書きましたが、特に楷書を得意としました。代表作**『九成宮醴泉銘』**（臨：小林、近藤泰、邢、牛田）は緻密な造形性と拡張の高さから「楷書の極則」と言われ、日本では昭和時代には小中学校の手本として取り入れられました。

✓ その他の臨書作品：中村勇『皇甫誕碑』

➢ 米芾（1051～1107【宋】）

宋の四大家の一人で、彼もまた王羲之をよく研究しました。書技、特に臨模に優れていて、その精密さは古人の真跡と区別がつかないほどだったといいます。代表作**『蜀素帖』**（臨：片野、吉岡、石本）は「蜀素」（蜀の国で織られた絹）に書かれたためこう名付けられ、一点一画が入筆から終筆までどの瞬間にも油断が見られないのが特徴です。

✓ その他の臨書作品：木下『虹懸詩巻』

➢ 王鐸（1592～1652 【明～清】）

彼は現代書道において絶大な人気を誇っています。条幅とよばれる細長い紙に連綿（字と字をつなげて書く技法）を多用して書かれる行草書が特徴的です。彼の作品は、臨書と自運（自作の詩を書く）に大別され、臨書は王羲之などの作品を極めて奔放に書いたものが多いですが、自運は謹厳な行書で書かれたものが多くなっています。（臨：荒巻、上西、安達、近藤佑）

➢ 楊峴（1819～1896 【清】）

彼は隷書が流行った清代において個性的な隷書を確立しました。特徴は穂先の微動によって変化に富んで生き生きとした線、そして独特で強烈に誇張された波磔表現（右はらいに似た装飾）です。呉昌碩（下記）は彼の魅力に取りつかれ、頼み込んで弟子にしてもらったといいます。（臨：徳田、勝野、越田）

➢ 呉昌碩（1844～1927 【清～中華民国】）

清代最後の文人です。詩・書・画・篆刻のすべてに精通していましたが、これらのベースには**『石鼓文』**（臨：笠原）があり、どの作品においてもこの筆法を押し通しました。特に人気がある彼の行草書は、強い右上がりで鋭さのある線とキュッと引き締まった字形が特徴的で、この書き方を意識して作品を創作する人も数多くいます。（臨：阪井田）

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『風景一時新』……11
　　創作・『得自在』……11

一回生

石本森羅　臨書・米芾『蜀素帖』……30
市川拓真　臨書・蘇軾『黄州寒食詩巻』……31
鵜川大輝　創作・『万葉集より冬の和歌』……19
牛田聡実　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……19
大橋葵　臨書・王羲之『十七帖』……31
越田真由　臨書・楊峴『隷書霓裳逸史四屏』……33
近藤佑香　臨書・王鐸『擬山園帖』……34
坂本和歌子　臨書・莫是龍『七言絶句幅』……34
中岡大吉　創作・『大夢』……22
中林亮　臨書・王羲之『集字聖教序』……23
野田恵子　臨書・作者不詳『石門頌』……37
松尾有輝也　臨書・趙孟頫『楷書玄妙観重脩三門記巻』……25
安田直記　臨書・黄庭堅『松風閣』……39
吉田凌祐　臨書・伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』……40

二回生

安達光寿　臨書・王鐸『行書五律五首巻』……19
覚道直治　臨書・王羲之『十七帖』……20
勝野初紀　臨書・楊峴『隷書十言聯』……13
金岡杏祐　臨書・文徴明『行書詩巻』……31
金山優作　創作・『懐古』……31
鬼頭由里香　臨書・何紹基『七言對聯』……36
邢書禹　創作・『袁枏の句』……36
佐山侑莉　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……23
建部壮一郎　創作・『除夜作』……36
中村勇真　臨書・作者不詳『牛橛造像記』……22
野田智子　臨書・欧陽詢『皇甫誕碑』……14
挟間優美　創作・『新春』……14
一二暉生　臨書・鍾繇『薦季直表』……34
平井達也　臨書・陳道復『詩書巻』……33
村上友梨　創作・『愛酒詩』……33
森ちひろ　臨書・文徴明『行書詩巻』……32
吉岡智志　臨書・黄道周『五言律詩幅』……13
　　臨書・米芾『蜀素帖』……20

三回生

阿部朱夏　臨書・林逋『松扇五詩巻』……12
今村朱里　臨書・呉熙載『楷書東方朔画賛』……19
小野日菜乃　臨書・王羲之『興福寺断碑』……40
神﨑七海　創作・『近江八景』……25
木上博之　臨書・中室水穂『和歌二首』……25
郡健一郎　臨書・智永『関中本千字文』……16
小林由佳　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……24
近藤泰仁　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……23
阪井田有紗　臨書・呉昌碩『七言律詩幅』……37
佐武千寛　臨書・倪元璐『行草七言絶句軸』……15
橘大輝　臨書・董其昌『酒徳頌巻』……35
徳田寛生　臨書・楊峴『隷書老子語紈扇』……34
仲村康太郎　創作・『破山寺の後ろの禅院』……22
　　創作・『投報』……21
　　創作・『色色易賢。』……32

中村直樹　臨書・伝小野道風『継色紙』……37
橋詰都　臨書・呉譲之『聖教序』……38
原誠人　創作・『降る雪や』……23
　　創作・『衝動』……38
原田拓実　創作・『白鳥の歌』……16
平野晶子　臨書・作者不詳『始平公造像記』……17

四回生

岡本晴香　創作・『広がる世界』……20
笠原知生　臨書・呉昌碩『臨石鼓文』……21
木下有羽　臨書・米芾『虹縣詩巻』……32
小森千裕　創作・『千利休』……22
清水麻友美　臨書・査昇『老懐』……35
下坂桃代　創作・『百人一首』……35
堀場菜摘　臨書・近衛家熙『金剛般若経』……24
眞嶋優一　創作・『冬景色』……39
宮部大志　臨書・顔真卿『多宝塔碑』……25
矢野凱己　創作・『今日もどこかで』……26
　　創作・『蝉』……39
山口和樹　創作・『竹聲松影』……39
山崎夏野　臨書・孫過庭『書譜』……27
山科直也　創作・『旅立ちの日に』……18
渡辺顕　創作・『倜儻不羈』……41

修士一回生

荒巻拓哉　臨書・王鐸『瓊蕊廬帖』……15
上西隆太　臨書・王鐸『臨宋儋帖』……33
藏岡凌平　創作・『竜跳虎臥』……12
宗哲仁　創作・『田家春望』……30

修士二回生

片野裕太　臨書・米芾『蜀素帖』……29
河合翼　創作・『彩鳳舞丹霄』……29
石博昭　創作・『風任せ』……29
藤田雄也　臨書・傅山『懸崖斷處七言詩軸』……27
家倉凌　創作・『清貧』……41
　　創作・『千字文』……41

博士課程修了

藤井基弘　創作・『桃栗三年』……28

合作

勝野初紀／金山優作　創作・『無常』……41
中村勇真／平井達也　創作・『楓橋夜泊』……27
小林由佳／平野晶子　創作・『塞外雑詠』……24
阿部朱夏／山崎夏野　創作・『ヒトボシ』……26
笠原知生／山科直也　創作・『維新一焦心録後に題す』……26
木下有羽／矢野凱己／山口和樹　創作・『樹』……17

二回生合作　『思い出のあの言葉』……35
四回生合作　『こころの書』……21
全体合作　『〇〇に物申す！』……21

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品

『風景一時新』

気持ちの赴くままに、一気に筆を走らせてみました。



○禅居庵作品

『得自在』

ゆったりと暢びやかに見せる為、何紹基風にしてみました。



○西来院

1

今村朱里　三回生
臨書　楷書　呉熙載『楷書東方朔画賛』　二尺×八尺

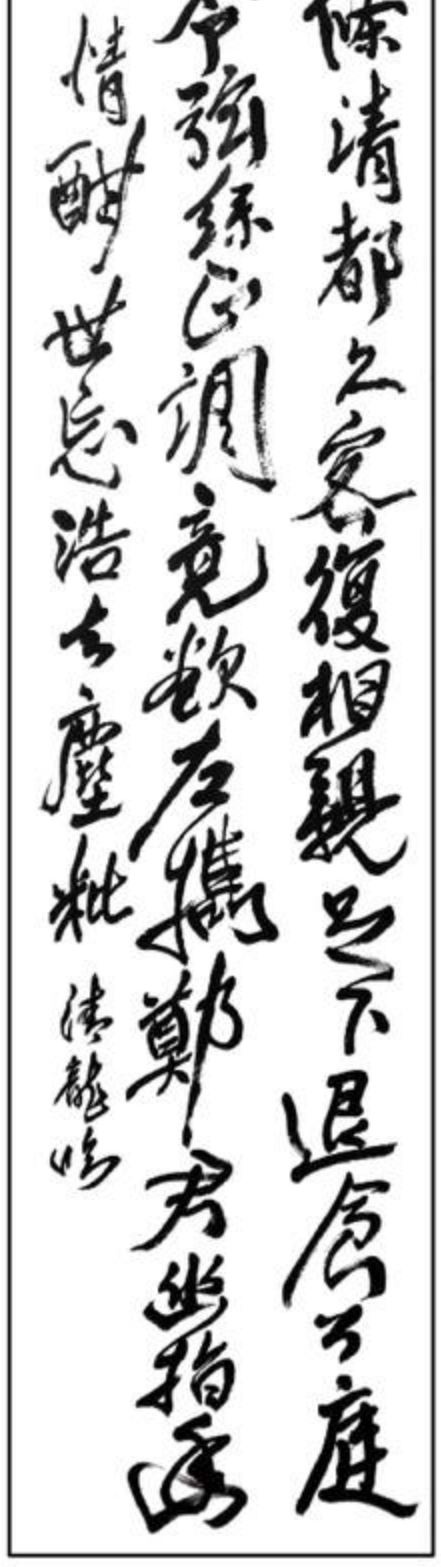
「清質而濁其文弛張而不為耶進退而不離羣若乃遠心……（略）」
初夏書展と同じ法帖でまた挑戦させていただきました。気づけばもう三回生の冬。残り少なくなりつつある学部生活、どのように書道部に関わっていけるか、考え出す日々です。



2

上西隆太　修士一回生
臨書　行書　王鐸『臨宋儋帖』　225cm×39cm

「野外變衰。長郊肅條。清都久客。復相親。足下退食公庭。櫛沐晞景。釀玉初令。弦絲正調。竟欲左攜鄭君。幽指幽指藥妙。高潭道微。情酣世忘。浩去塵粃。」
王鐸三十九歳の作です。他の連綿草の作品ほど派手さはありませんが、独特な字形や構成、滑らかで力強い筆致に魅かれました。できるだけ法帖に忠実に、見ていて飽きない作品を目指しています。



3

勝野初紀　二回生

臨書　隷書　楊峴『隷書十言聯』　一尺×八尺　二連

「清晨聞叩門壺漿遠見侯　相思則披衣言咲難為因」

一回生の頃、先輩の楊峴の作品に一目惚れをしました。あの時の気持ちは今も忘れられません。いつか私も一目惚れをしてもらえるような作品を書きたいものです。心がキューとなり、今すぐ筆を握りたくなるような気持ちにさせてくれる作品に出逢えることはこの上なく幸せです。





4

神﨑七海　三回生

創作　木簡　『近江八景』　二尺×八尺

「堅田落雁比良雪　湖上風光此處收　煙罩歸帆矢橋渡　風吹嵐翠粟津洲　夜寒唐崎松間雨　月冷石山堂外秋　三井晩鐘瀬田夕　征人容易惹鄉愁」

「堅田落雁比良雪　湖上風光此處收　煙罩歸帆矢橋渡　風吹嵐翠粟津洲　夜寒唐崎松間雨　月冷石山堂外秋　三井晩鐘瀬田夕　征人容易惹鄉愁」

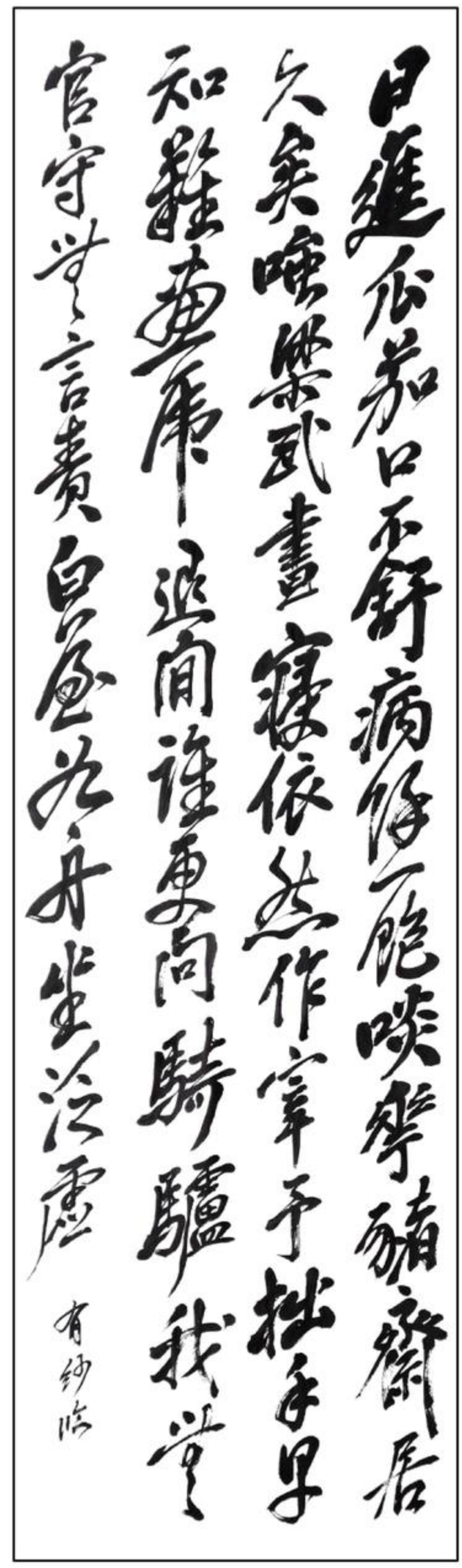
木簡風のころんとした可愛らしい雰囲気の作品を目指しました。



5

阪井田有紗　三回生
臨書　行書　呉昌碩『七言律詩幅』　二尺×七尺

「日進瓜茄口不舒、病除一飽啖華猪。齋居久矣嗤梁武、晝寢依然作宰予。拙手早知難畫虎、退間誰更問騎驢。我無官守無言責、白屋如舟坐泛虚。」



6

佐武千寛　三回生
臨書　行草書　倪元璐『行草七言絶句軸』　242.4cm×50.6cm

「寂莫幽齋暝煙起。満径西風落松子。遠公一去兜率宮。惟有門前虎渓水。」

普段はかすれの少ない堅めの行書を書いているのですが、今回は独特な潤渇に惹かれて草書に近い書を臨書してみました。お洒落な掠れを出すことは私にとって本当に難しいのですが、そうとわかっていながら憧れてやみません。

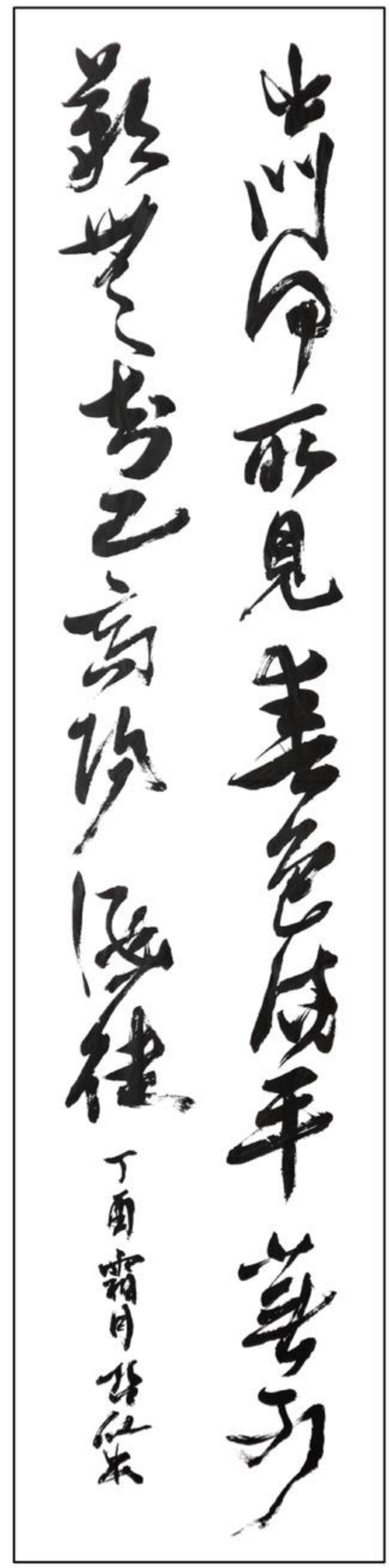


7

宗哲仁　修士一回生
創作　行草書　『田家春望』　二尺×八尺

「出門何所見　春色滿平蕪　可歎無知己　高陽一酒徒」

これで何度目かの出品か分かりませんが、初めて一文字飛ばしてしまうという大失態を犯してしまいました。お見苦しい作品になりましたことをお詫び申し上げます。今後同じ過ちを繰り返すことのないよう深く反省し、精進して参りたいと思います。



8

中村勇真　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『皇甫誕碑』　二尺×八尺

「英聲煥乎記牒　徽烈著於旂常　豈若疊起蕭墻　禍生藩翰　強踰七國勢重三監　其有蹈水火而辭臨鋒刃而莫顧　激清風於後葉　抗名節於當時　者見之知義　明公矣君」

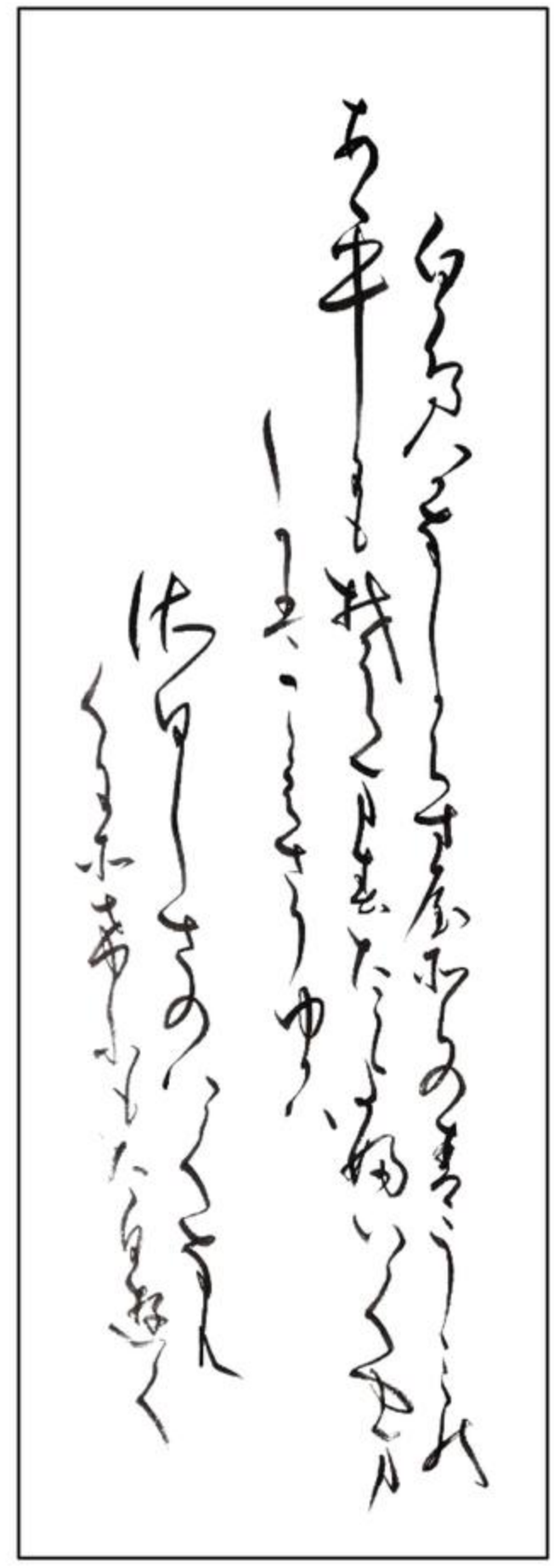
「英聲煥乎記牒。徽烈著於旂常。……（略）……計算された緊密な字形、鋭い線質、凛然と聳え立つその様に魅了され臨書しました。この字のように、鋭く筋の通った人になりたいものです。



9

原田拓実　三回生
創作　かな　『白鳥の歌』　二尺×六尺

「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」
若山牧水の短歌から、シンパシーを感じた二首を書きました。ふたつの歌がひと続きになっているような感じが好きです。



10

平井達也　二回生
創作　金文　『愛酒詩』　二尺×八尺

「愛酒龍馬　酒者可呑酒可飲人生只有酒開膽醉中快樂人無知大地爲蓐天爲衣英雄生涯眞乎夢厭迄呑酒醉美姫」
酔っぱらっている時に書いたものが一番いい出来だったあの書聖から、何かにつけて飲み会をする現代の大学生に至るまで、どの時代にも「ハイボール飲んでウィ～！」という人は一定数いるようです。



11

平野晶子　三回生

臨書　楷書　作者不詳『始平公造像記』　二尺×八尺

「始平公像一區夫靈蹤啟則攀宗靡尋容像不陳則崇之必是以真顏於上齡遺形敷於下葉暨於大代茲功厥作比丘慧成自以影濯玄流邀逢昌運率渇誠心為國造石窟寺荅」。この数ケ月、何度自問自答したことでしょう。造像記には珍しい陽刻(文字が浮き出るように彫刻すること)の特徴に倣いつつ、書道作品として魅力ある、そして納得のいく紙面にしようと試みました。



12

藤田雄也　修士二回生

臨書　草書　傅山『懸崖斷處七言詩軸』　二尺×八尺

「懸崖斷處積幽寒　濃樹如雲黑一團　莫道山中無結構　茆簷趁水有闌杆」

これが書道部で出す最後の作品になります。今の自分の中にあるものが出せたら嬉しいです。



13

山科直也　四回生

創作　調和体　『旅立ちの日に』　二尺×八尺

「白い光の中に山並は萌えて遥かな空の果てまでも君は飛立つ限りなく青い空に心震わせ自由をかける鳥よ振返ることもせず」

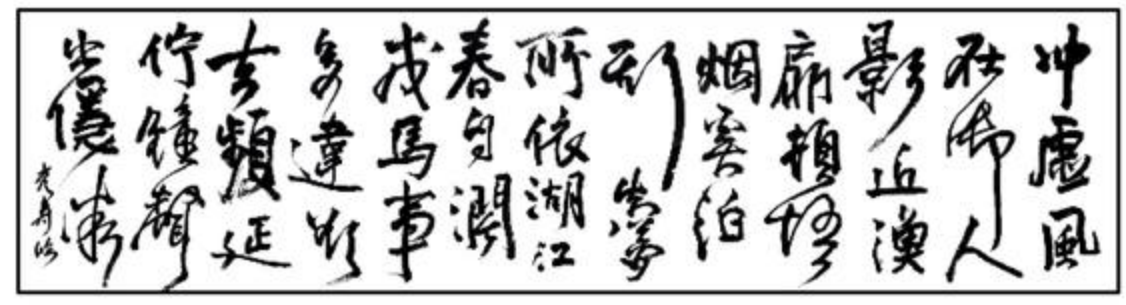
未熟故に不十分。されどこの四年間を表現するにはこの筆に、この紙に、この墨に託すより他ない。



14

安達光寿　二回生
臨書　行書　王鐸『行書五律五首巻』　半切横

「沖虚風在御。人影近漁扉。頓悟烟奚泊。斯知夢所依。湖江春自濶。戎馬事多違。欲去頻延佇。鐘聲出隠微。」
われおんみの前に恍惚として立つ。



15

阿部朱夏　三回生
臨書　行書　林逋『松扇五詩巻』　半切

「制誥李舎人以松扇」
法帖は細字の巻子仕立てなのですが、字形が好きな部分だけ選んだら半切一行書になりました。今の私はこの文字数が集中力の続く限界です…



16

鵜川大輝　一回生
創作　かな　『万葉集より冬の和歌』　半切

「我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れれば」
有名な山部赤人の詠んだ非常に綺麗な和歌です。少し気が早いのには目を瞑って、景色を思い浮かべながら観ていただけたらいいなと思いながら書きました。



17

牛田聡実　一回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「承以石檻引為一渠其清若鏡味甘」
初めての書展への出品です。まずは基本中の基本ともいえる作品の臨書に挑戦しようと思いました。法帖のすっきりとした線や始筆、終筆など、まだまだ課題は多いですが、ご批評よろしくお願いします。



18

岡本晴香　四回生
創作　調和体　『広がる世界』　二尺×六尺横

「昔思い描いた理想との差はかなりのもので……（略）」
なかなか練習時間が取れませんでしたが、できる範囲で書きました。作品を制作していると、「やっぱり私は書道が好きなんだな。」と実感します。行間をすっきり見せることや行の揺れを意識しつつ、あまり深く考えすぎずに書き上げました。



19

小野日菜乃　三回生
臨書　行書　王羲之『興福寺断碑』　半切

「在京興福寺陪常住集晉右軍将軍王羲之行書勒上……（略）」
王羲之の字を集めて作られたとされるこの碑は、同じく『集字聖教序』より五十年程後の作品です。全体の統一がとれている点、ゆったりとした伸びやかな字形が多い点に惹かれ、この作品を選びました。冒頭の「京」とは、唐の都・長安のことであり、発見時から上部が欠損していたことから断碑と呼ばれます。

NO IMAGE

20

覚道直治　二回生
臨書　草書　王羲之『十七帖』　半切

「五帝以來備有書又精妙甚可觀也彼有能書者不欲因摹」
草書をさらっと読める系男子になりたくて書きました。多分一生読めないと悟りながらも楽しく練習できました。



21

笠原知生　四回生
臨書　篆書　呉昌碩『臨石鼓文』　半切

「麋豕孔庶麀鹿雉兔其又紳其奔大出各亞昊執而勿射庶轢々君子迺樂」
最後の出品にして初めて篆書に挑戦しました。呉昌碩は壮年期に石鼓文の臨書を始め、生涯を閉じるまで書き続けたそうです。それに比べれば未熟極まりないですが、見て頂けると幸いです。



22

片野裕太　修士二回生
臨書　行草書　米芾『蜀素帖』　半切

「鶴有沖心龜厭曳尾居　将上雲衢一語墮泥塗」
最後の書展には一番好きな米芾の作品を臨書したいと思いました。また、鶴と亀という縁起のいい動物が登場し、最後に教訓めいた文章で終わることも面白かったので書きたいと思いました。書道部での日々を生かし社会人になってからも頑張りたいです。



23

河合翼　修士二回生
創作　楷書　『彩鳳舞丹霄』　半切

「彩鳳舞丹霄」
字自体が表現する情景だけではなく、そこに詰められた色々な思い出から好きな言葉です。



24

鬼頭由里香　二回生
創作　行書　『袁枏の句』　半切

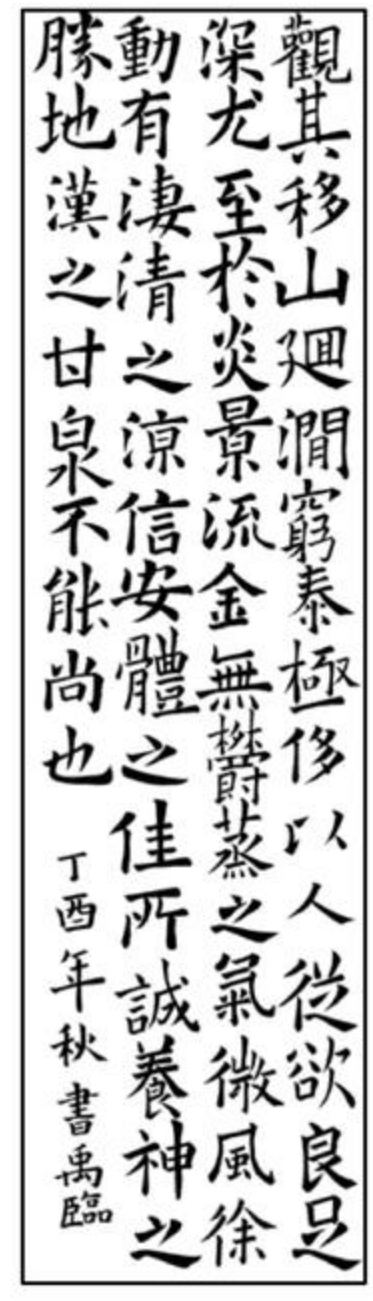
「白鷗遠水清秋鏡　紅葉前峯落照圖」
秋の綺麗な情景を想像しながら書きました。



25

邢書禹　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

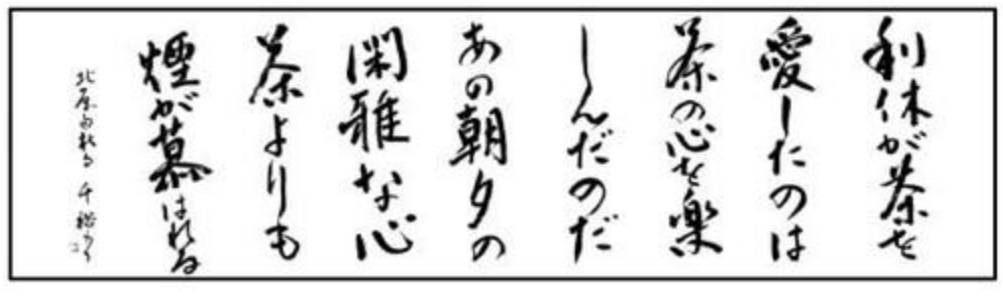
「觀其移山徊澗、窮泰極侈、以人從欲、良足深尤。至於炎景流金、無鬱蒸之氣、微風徐動、有淒清之涼。信安體之佳所、誠養神之勝地。漢之甘泉、不能尚也。」
やはり欧陽詢の楷書が好きなので、二回目に九成宮を書きました。でもなかなか上達できないので、やはりもっと練習しなければならないです。これからも頑張りたいと思います。



26

小森千裕　四回生
創作　調和体　『千利休』　半切横

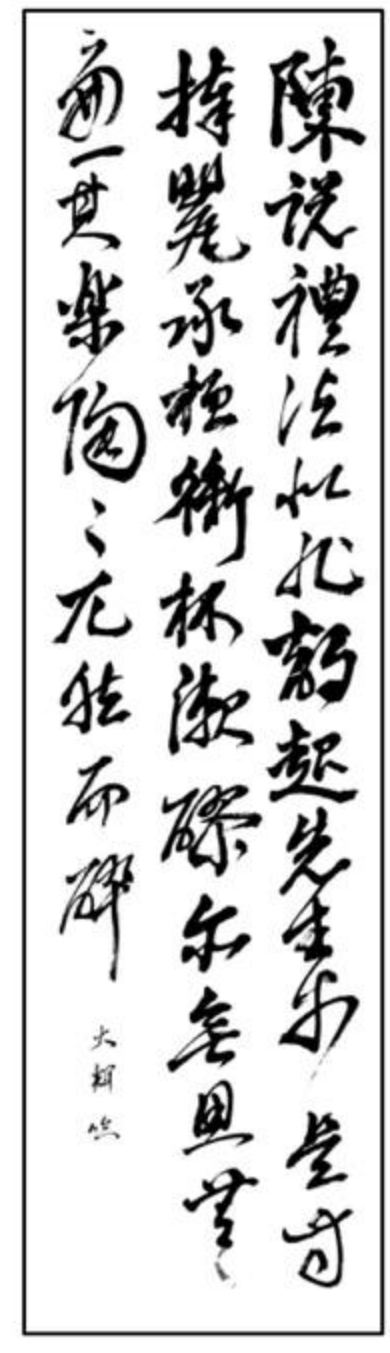
「利休が茶を愛したのは　茶の心を楽しんだのだ　あの朝夕の閑雅な心　茶よりも煙が慕われる。」
「利休が茶を愛したのは　茶よりも煙が慕われる。」　この一節を知った際に強く惹かれ、いつの日か自分の作品にしてみたいとずっと考えておりました。自分の書体を確立させることは想像以上に難しく、苦労しましたが、四年間続けてきた茶道部の額があり、謙信の人生観に思いを馳せながら書き上げました。
生活の集大成として、作品を残すことができたのは財産です。



27

橘大輝　三回生
臨書　行草書　董其昌『酒徳頌巻』　半切

「陳説禮法是非鋒起先生於是方捧巵承槽銜杯漱醪亦無思無慮其樂陶陶兀然而醉」
酒徳頌は、劉伶の著作です。彼は、何時も泥酔して奔放な振る舞いをしていたと記録に残っています。禁酒を神に祈るも、そのお供えの酒を飲んだそうです。お酒はほどほどにしたいものです。



28

中岡大吉　一回生
創作　行書・隷書　『大夢』　全紙

「大夢　四十九年一睡夢一期栄華一盃酒」
大夢は「人生は夢幻のようなもの」、左下の謙信の辞世の句は、「四十九年の人生など一眠りの夢のように短く儚いもので、生涯の栄華など盃一杯の酒のようなものに過ぎなかった」という意味です。上杉家の菩提寺の林泉寺には謙信自らが揮毫した大夢の額があり、謙信の人生観に思いを馳せながら書き上げました。



29

中林亮　一回生
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「蓋聞二儀有像顕覆載以含生四時無形」
王羲之に初めて挑戦しました。上手く書けるようになりたいです。



30

仲村康太郎　三回生
創作　行草書　『破山寺の後ろの禅院』　半切二連

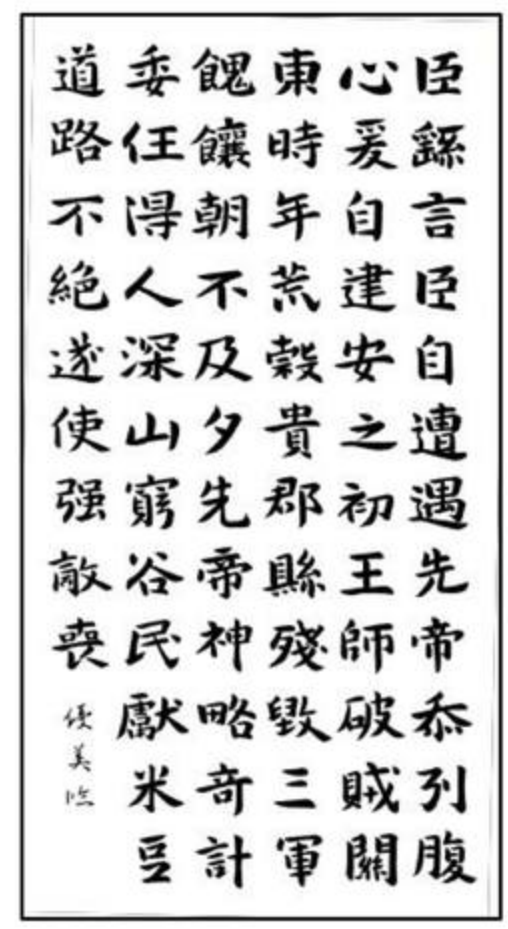
「清晨入古寺　初日照高林　曲径通幽処　禅房花木深　山光悦鳥性　潭影空人心
万籟此皆寂　惟聞鐘磬音。」
五言律詩。作者の常建は盛唐の詩人だが足跡不詳。本詩は清々しい早朝の山寺にただ鐘と磬(への字形の打楽器)を打つ音だけが聞こえてくるという静寂さを歌う。王羲之や王鐸を中心に集字し、無理のない構成に努め、自然な流れと明快さを求めた。作品の明快さが詩意とともに自然と鑑賞者に伝われば此れ幸い。



31

挟間優美　二回生
臨書　楷書　鍾繇『薦季直表』　全紙

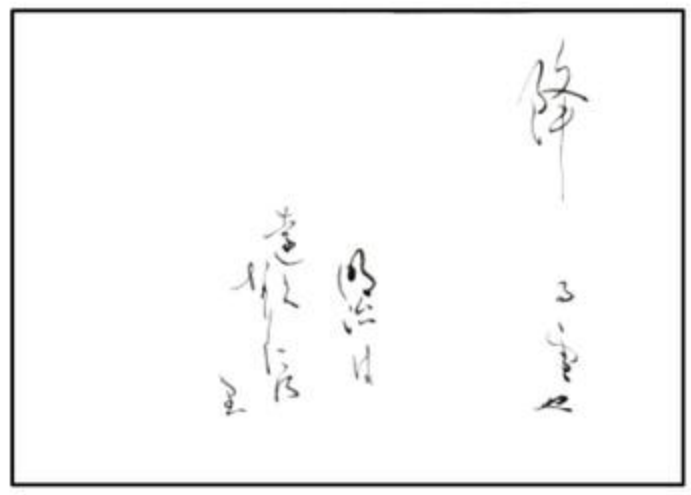
「臣繇言。臣自遭遇先帝、忝列腹心。爰自建安之初王師破賊関東時、年荒穀貴……(略)」
もちもち柔らかくてあざとい、けれどどこか重厚感もある。そんなフォルムに一目惚れして臨書しました。一文字一文字よく可愛がりながら書いたつもりですが、鍾繇の字にはまだまだ遠く及びません。



32

原誠人　三回生
創作　調和体　『降る雪や』　半紙

「降る雪や明治は遠くなりにけり」
中村草田男三十歳(昭和六年)の句(『長子』)。雪の降りしきる古い小学校で、俳人は現在が未だ明治であるかのように錯覚し、その二律背反として明治の永久の消失を思ったといいます(『俳句入門』)。書風に翠軒流への憧憬を込めつつ、句の成す文学空間にさまよい、向き合い、表すことを求めた、今年の最重点作です。



33

一二暉生　二回生

臨書　草書　陳道復『詩書巻』　巻子

「東風飄々不絶吹。遊蜂舞蝶相追随。水花嬌然媚晴晝。深紅淺白紛差池……（略）」

ここ一年間、癖がすごい草書ばかりをやってきましたが、久々に王道寄りの作品を選んでみました。この作品を書いている間は初心にもどったような、非常に刺激的な時間でした。



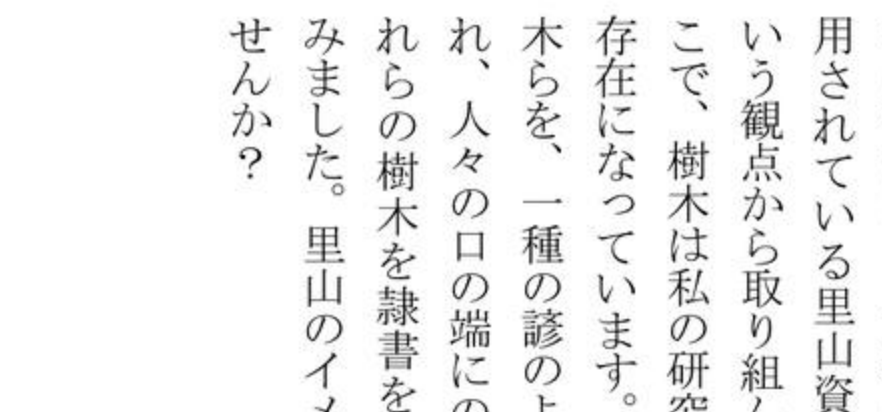
34

藤井基弘　博士課程修了

創作　調和体　『桃栗三年』　51.5cm×93cm

「桃栗三年柿八年　柚子ノ大馬鹿十八年　梅ハスイトテ十三年」

私の研究は、〝京都の伝統行事に使用されている里山資源の利用〟という観点から取り組んでいます。そこで、樹木は私の研究に欠かせない存在になっています。題目に有る樹木らを、一種の諺のように言い古され、人々の口の端にのぼっているこれらの樹木を隷書を主体に書いてみました。里山のイメージが湧きませんか？



35

堀場菜摘　四回生

臨書　隷書　近衛家熙『金剛般若経』　巻子

「阿耨多羅三藐三菩提……（略）」

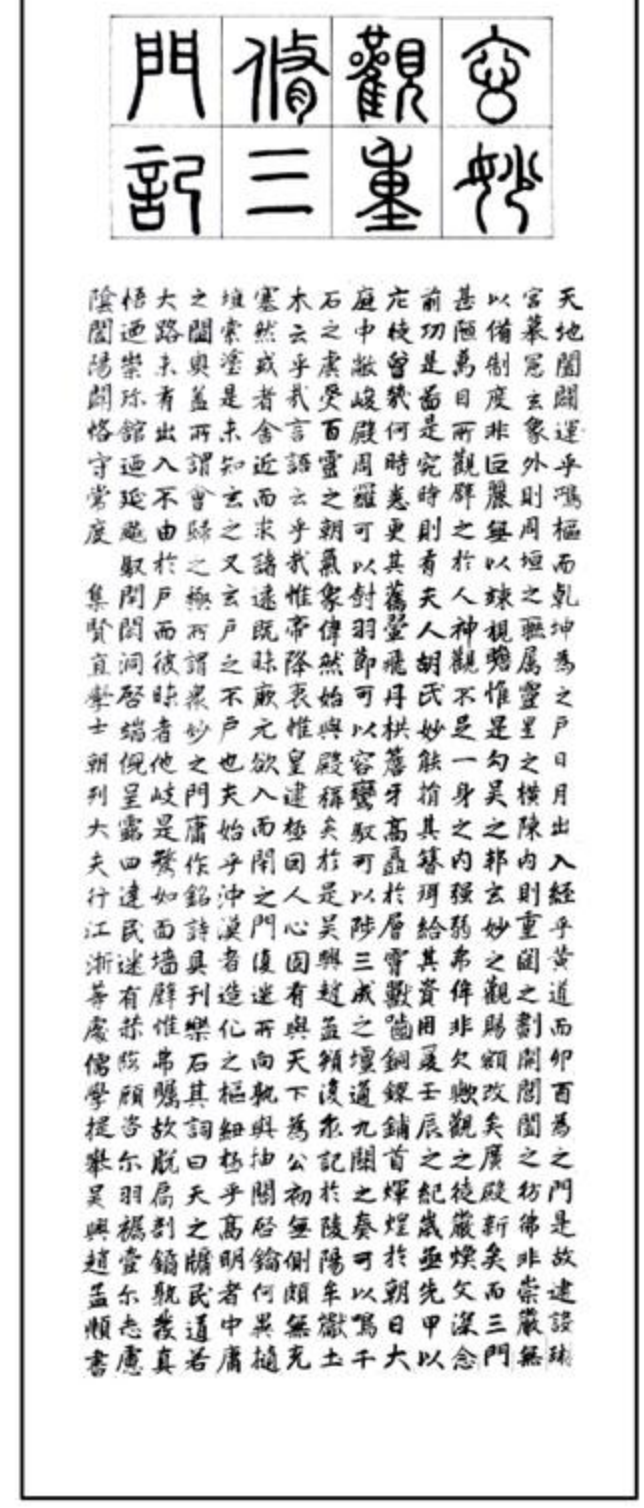
きれいな隷書が好きなので、その雰囲気が少しでも出すことができていたら幸いです。



36

松尾有輝也　一回生
臨書　楷書　趙孟頫『楷書玄妙観重脩三門記巻』　聯落

「玄妙観重修三門記　天地闔闢運乎……（略）」
文字が多かったです。



37

宮部大志　四回生
臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

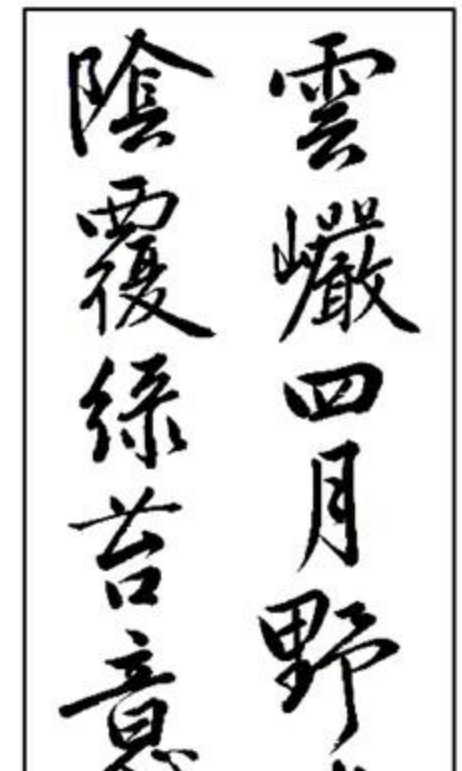
「念照圓鏡於十方指陰界為妙門駈」
書道、それなりに楽しめるくらいには多分なりました。



38

村上友梨　二回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切

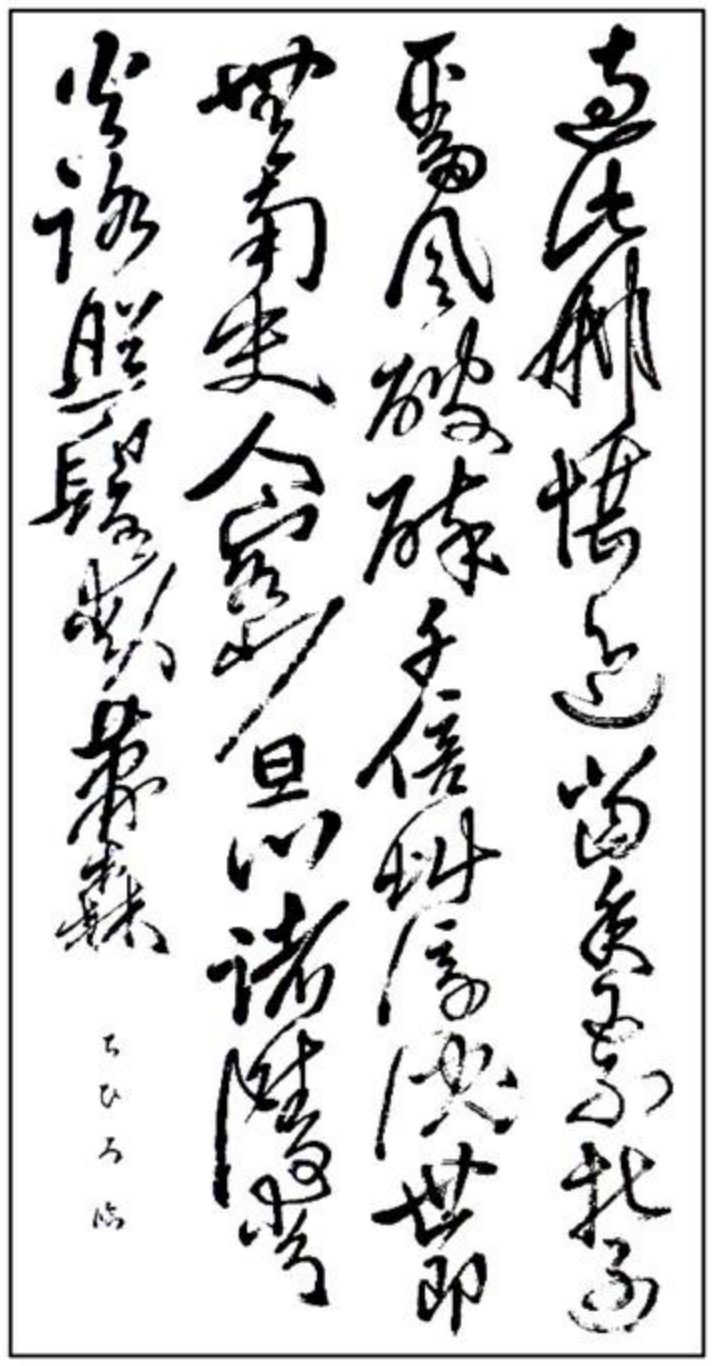
「雲巖四月野棠開無數清陰覆綠苔意到不嫌」
すっきりした文字に惹かれて書き始めましたが、最後まですっきりした文字に苦しめられました。



39

森ちひろ　二回生
臨書　草書　黄道周『五言律詩幅』　全紙

「過此那慳遙當年已不禁一番風破碎千倍艸浮沈世即無南史人客少旦心諸陵爰火路照髪動簫森」
書道部に入部して早半年、行書、楷書と順に書いてきたので、二〇十七年の最後は草書にしてみました。法帖選びから構成まで迷いに迷いましたが、リズム感を意識してカッコイイ草書を目指しました。ご批評よろしくお願いいたします。



40

家倉凌　修士二回生
創作　行書　『清貧』　50cm×100cm

「清貧」
欲しかった物が手に入ると途端に気持ちが覚めてしまうことがあります。ならば身の一つでいることに美学を持っていたいです。物欲や所有欲というのは果てしないものですが、それを振り払う激しい意思を込めました。



41

家倉凌　修士二回生
創作　行書　『千字文』　二尺×六尺　四連

「天地玄黄　宇宙洪荒　日月盈昃　辰宿列張　寒來暑往　秋収冬藏……（略）」
研究の合間の制作で、四枚書くのに一ヵ月かかってしまいました。まとまりの無さは否めませんが、その間の心境や技術的関心の変化が素直に表れた点は見所と思います。何を書いても結局はその時の自分が現れるということが、僕にとって諦めと同時に救いです。これからの自分がどんな作品を書くのか楽しみに思います。



42

矢野凱己　四回生
創作　調和体　『今日もどこかで』　二尺×八尺三分の一

「なつかしい笑顔が浮かんでは消えてゆく」
あの日あの時あの場所で書道部に入部して早四年。〆切に追われて「眠れぬ夜」も、笑ってはしゃいだ「キラキラ」な日々もあったが、「たしかなこと」はこの四年間が「wonderful life」だったということ。この作品は、「言葉にできない」ほどの感謝を込めた「僕の贈りもの」。



43

山崎夏野　四回生
臨書　草書　孫過庭『書譜』　半切

「轉從横自茲已降不能兼善者有所不逮非專精也雖篆隸草章工用多變済成厥美各有攸宜尚婉而通」

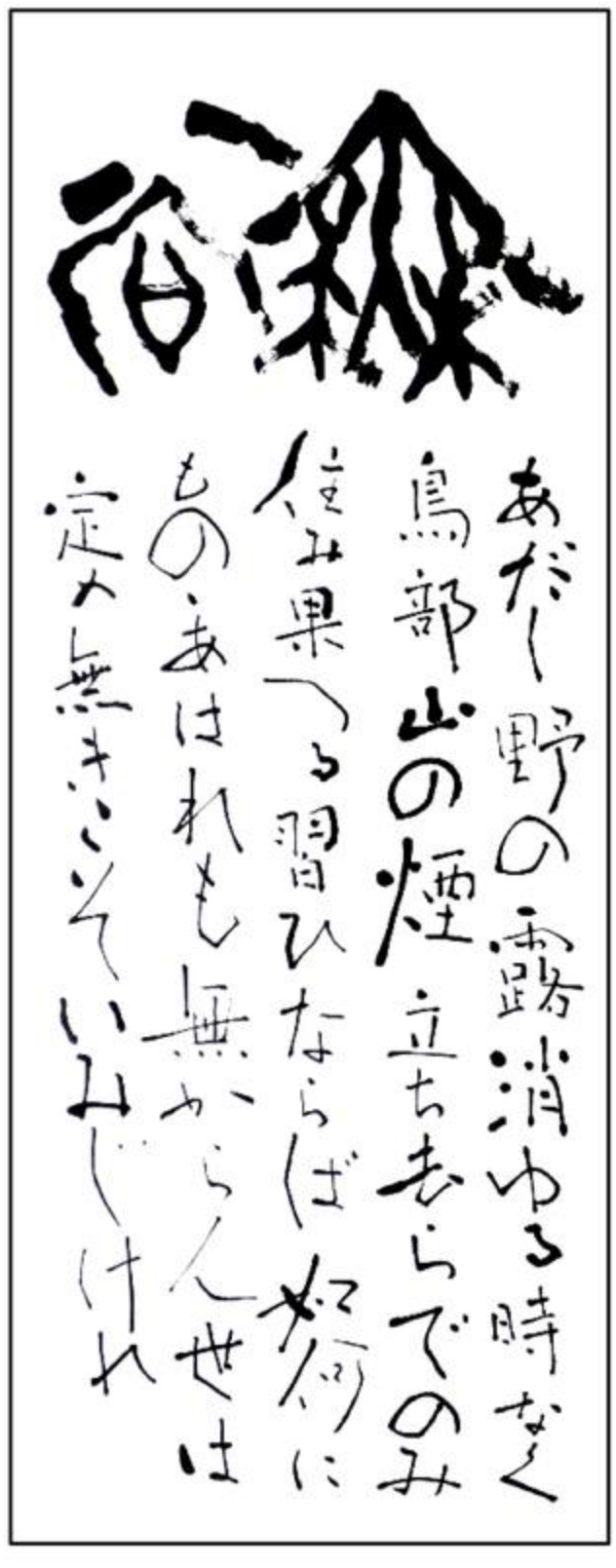
書展には毎回、なんとか作品を出し続けていましたが、ついに最後となりました。四年間で少しでも成長できていたら、と思います。



44

勝野初紀　二回生
創作　篆書・調和体　『無常』　聯落

「無常　あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙　立ち去らでのみ住み果つる習ひならば　如何にものの　あはれも無からん。世は定めなきこそいみじけれ。」



45

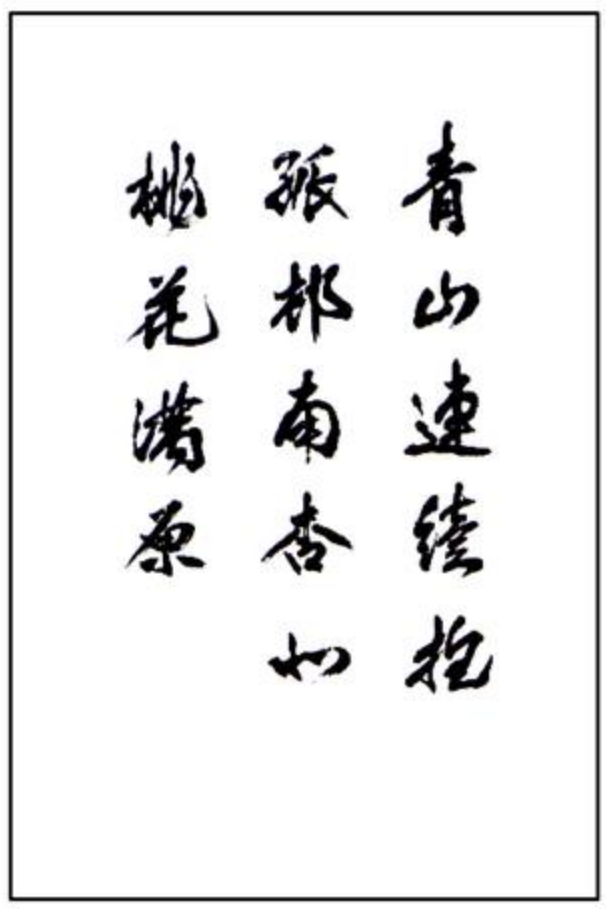
木下有羽　四回生　・　矢野凱己　四回生　・　山口和樹　四回生
創作　草書・調和体・行書　『樹』　全紙横

「青白き花開いて樹に満つ　青山連續抱孤邨南杏北桃花満原」

樹は幾つもの枝に分かれて伸びていく。どの枝にも花は咲く。人生も。







46

小林由佳　三回生　・　平野晶子　三回生

創作　行草書　『塞外雑詠』　半切　二連

「沙礫當途太不平勞薪頑鐵日交爭／車箱簸似箕中粟愁聽隆隆亂石聲」

清朝末期の政治家、林則徐の漢詩を呉昌碩風に創作しました。呉昌碩の特徴である右上がりと、行の流れを止めないことを意識しました。清を欧米列強の侵略から守るべく、左遷されながらも清廉潔白を掲げ続けた彼の情熱を伝えられると幸いです。





47　二回生合作
創作　『思い出のあの言葉』
今回、二回生は「思い出のあの言葉」という事をテーマに合作しました。今までの人生で自分の支えになった言葉、本を読んで心に刺さった言葉、座右の銘など、思い出に残っている言葉を筆で書きました。その言葉への思いも添えてあります。あなたの思い出の言葉はなんですか？

48　四回生合作
創作　『こころの書』
心のかたちを、筆にのせて。

49　全体合作
創作　『〇〇に物申す！』
今回の全体合作は「〇〇に物申す！」です。歴史上の人物や現実世界の人物、キャラクターや物などに対しての思いを綴りました。今回は来場者の方による人気投票を行う予定です。楽しんでいただけましたら幸いです。

○禅居庵

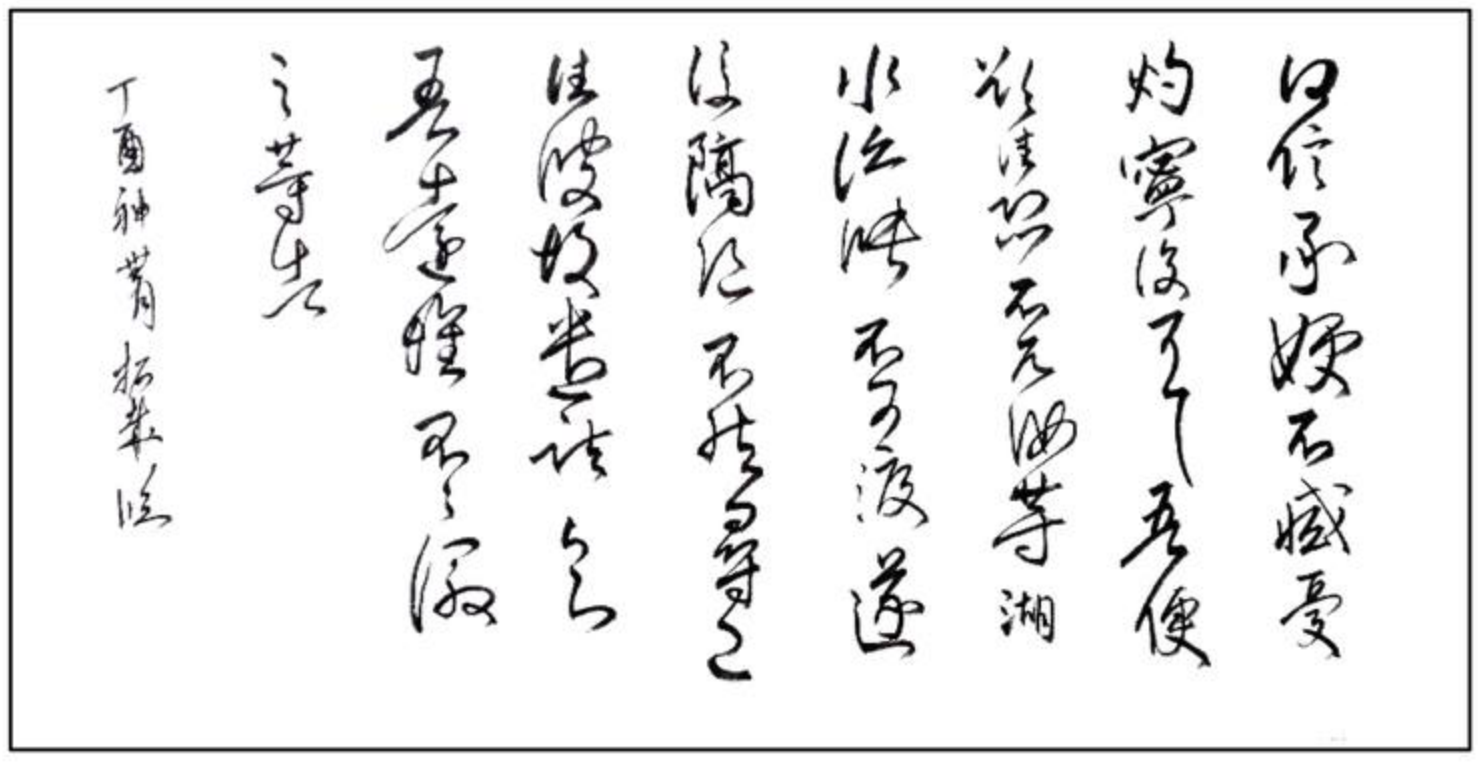
50

荒巻拓哉　修士一回生

臨書　草書　王鐸『瓊瑤廬帖』　半切二分の一横

「得信承娣不減憂灼寧復可言吾便欲往恐不見汝等湖水泛漲不可渡遂復隔絶不然尋已往彼故遣疏知吾遠懐不具徽之等告」

大学院生になってなかなか練習の時間も取れず、ついに前回の書展では一作品も出せませんでした。それでも細く長く続けていきたいところです。



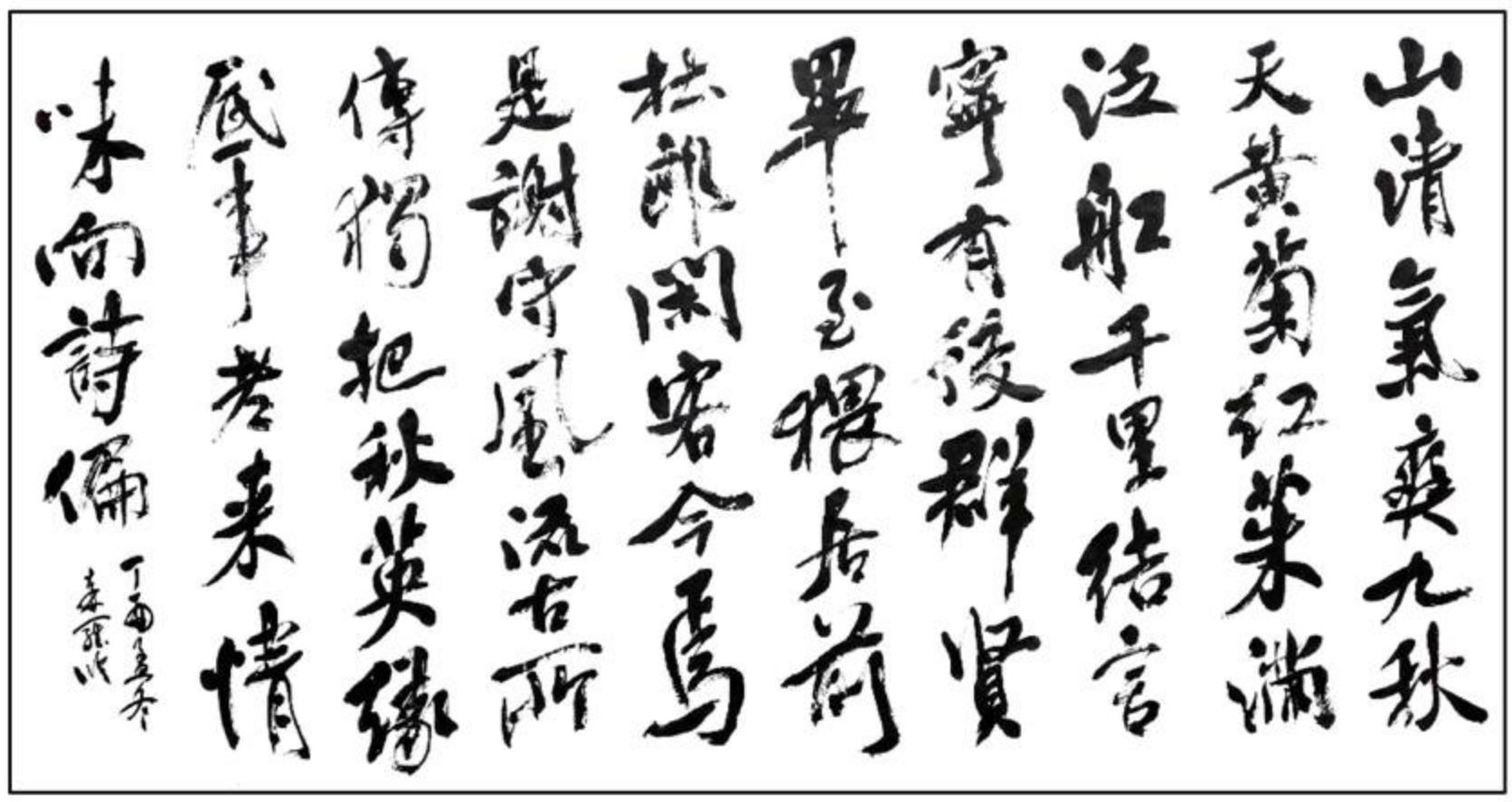
51

石本森羅　一回生

臨書　行書　米芾『蜀素帖』　全紙横

「山清氣爽九秋天、黄菊紅茱満泛船……（略）」

米芾の行書は力強いのに嫌味がなくさっぱりしていて、見れば見るほど引き込まれます。潤渇の大胆な変化で立体感が出るようにしました。



52

市川拓真　一回生
臨書　行書　蘇軾『黄州寒食詩巻』　半切

「自我来黄州已過三寒食年年欲惜春」
蘇軾の作品に二度目の挑戦をしました。前回は「赤壁賦」を臨書したんですが、それとは字体がまた異なっていて難儀しました。



53

大橋葵　一回生
臨書　草書　王羲之『十七帖』　半切

「十七日先書。郗司馬未去。卽日得足下書爲慰。先書以具示。復數字。吾前東。粗足作佳」
ついこの間入学したばかりのような気分ですが、気付けばこうして書展に出品する時期になっていました。不安だらけの入部当初からは考えられない程、同期にも先輩方にも親しくして頂けて本当に嬉しいです。今回は草書が書きたくてこの法帖を選びましたが、在学中に様々な書体に挑戦してみたいと思っています。



54

金岡杏祐　二回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切

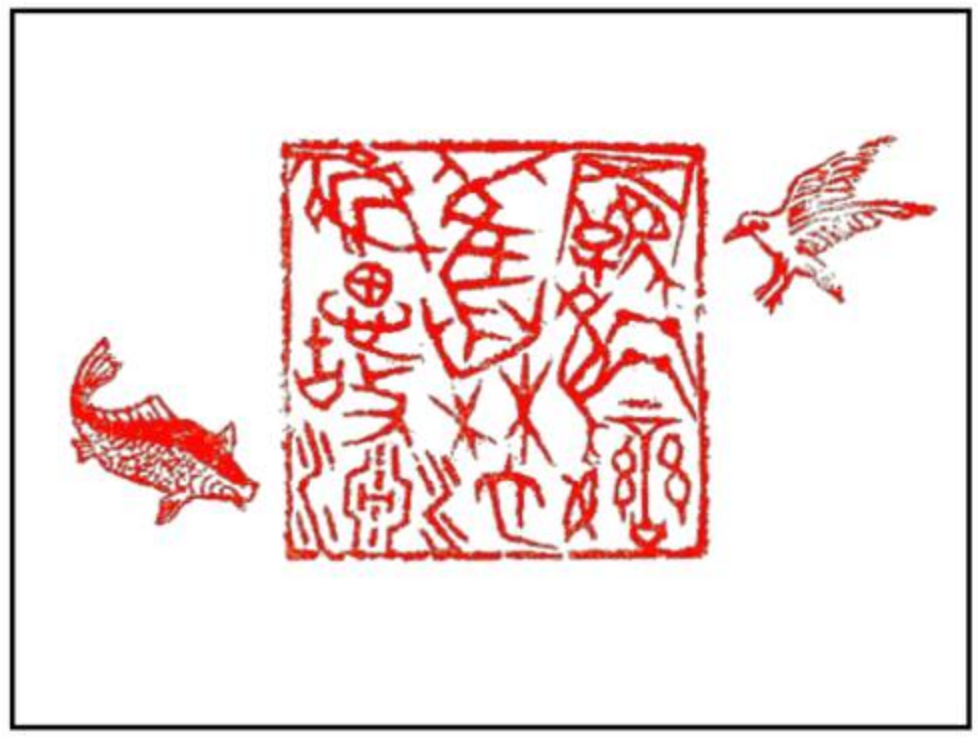
「不嫌三月盡勝遊剛喜四難幷品泉有意追鴻漸悟石無由問道生斜日滿原松影亂」
文徴明を臨書するのは今回で二度目です。前回は半切二行で、今回は半切三行に挑戦しました。文字数が増えたので、行間をすっきり見せるのに苦労しました。文徴明の右上がりのきいた字形の格好良さと行書の勢いを感じて頂けたら嬉しいです。



55

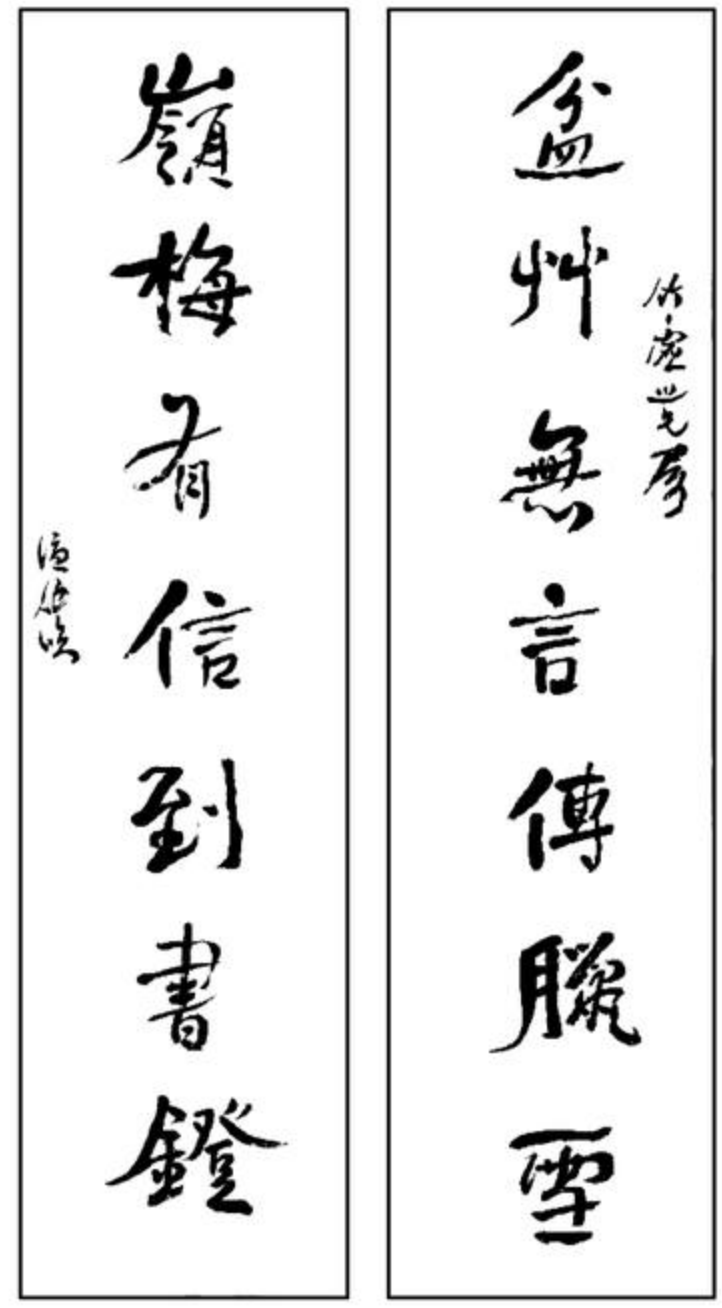
金山優作　二回生
創作　篆刻　『懐古』　葉書

「羈鳥戀舊林　池魚思故淵」
籠に囚われた鳥は前にいた林を恋しがり、池の魚はもといた河川をなつかしがる、という陶淵明の句を刻りました。この書道部がいずれ私にとって懐かしの自由な場所になるのでしょうか。



56

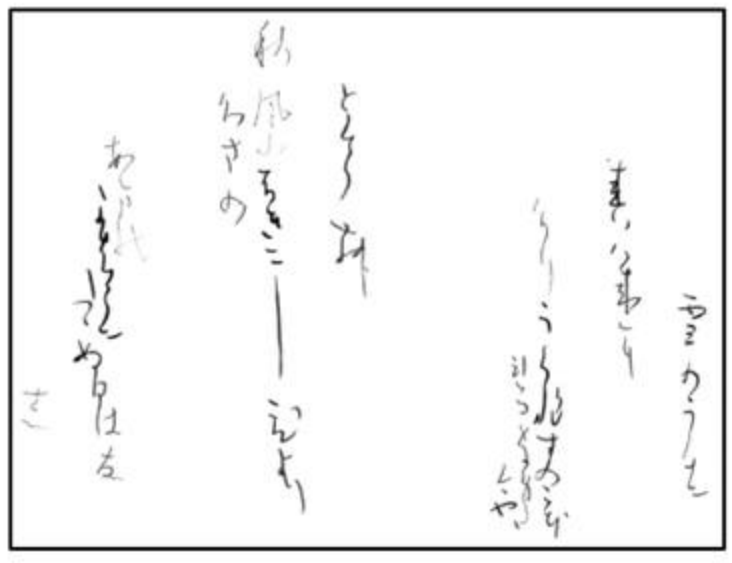
金山優作　二回生
臨書　行書　何紹基『七言對聯』　半切　二連



「盆卉無言傳臘雪　嶺梅有信到書鐙」
何紹基の行書は決して分かりやすく力強いわけではなく、一見すると弱々しいかもしれないが、そこには確かな力強さがある。その力強さが表現できていたら幸いである。

57

木上博之　三回生
臨書　かな　中室水穂『和歌二首』　半懐紙



「雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ　秋風の吹きにし日より久方のあまのかはらにたたぬ日はなし」
人がいるから悪いことも起きるし良いことも起こるんちゃうかなと思うよ。

58

木下有羽　四回生
臨書　行書　米芾『虹縣詩巻』　30cm×100cm



「虹縣舊題云快霽一天清淑」
学年が上がったらサクッと作品を仕上げられるようになるのかと思ってましたが、全然そんなことないですね。締め切り日は相も変わらず深夜書道でした（笑）

59

藏岡凌平　修士一回生
創作　篆刻『竜跳虎臥』　色紙

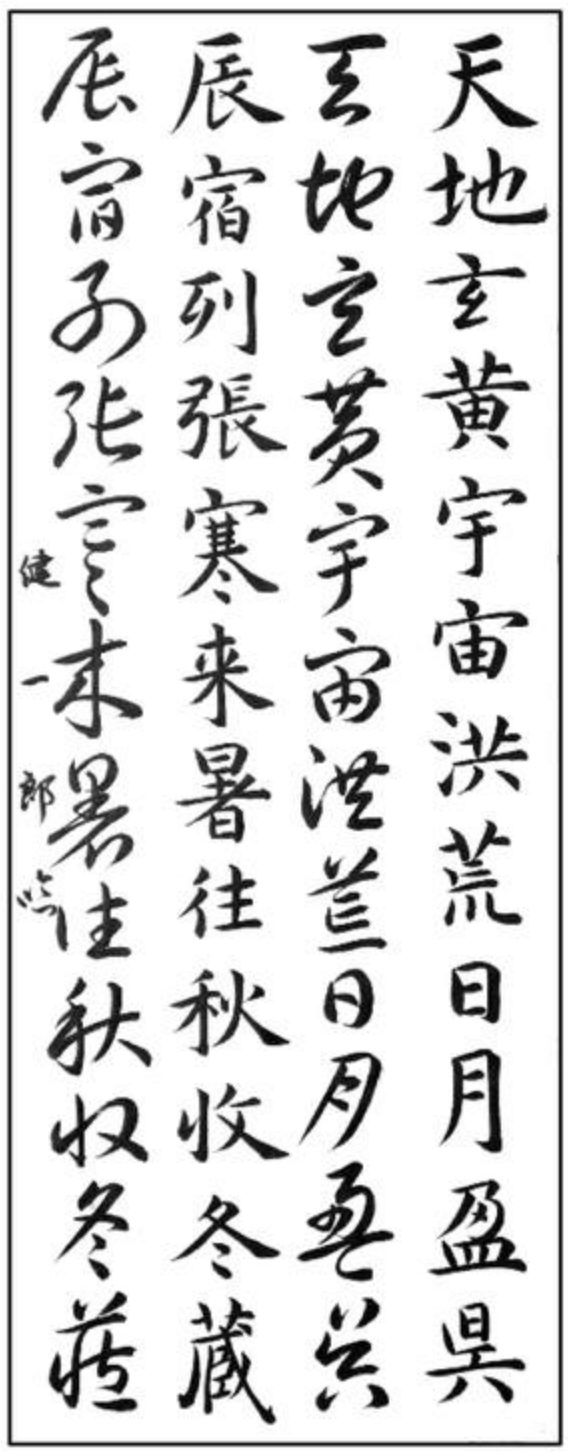
「竜跳虎臥」
一度オーソドックスな形式の篆刻作品をつくりたいとだけ思って彫り始めたところ、彫っている最中に石選びからきちんとしようという反省に至りました。竜と虎が並んでいる字面からは想像しにくいですが、王羲之の書を評した言葉から生まれた四字熟語だそうです。



60

郡健一郎　三回生
臨書　楷書・草書　智永『関中本千字文』　聯落

「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒来暑往秋収冬蔵」
楷書と草書の調和、字間、行間、落款の入れ方など悩ましい点が多々あり、色々と試行錯誤しました。学年が上がるにつれて書道に割ける時間が少なくなっていることに、時間の大切さを感じる今日この頃です。



61

越田真由　一回生
臨書　隷書　楊峴『隷書霓裳逸史四屏』　半切

「請明皇同登。約行数里。精光奪目。寒気侵入。遂至大城闕。」
初めて楊峴に挑戦しました。隷書なのに縦長の字があったり右上がりの字があったりと苦戦しましたが、たくさんアドバイスをいただいてなんとか書くことができました。



62

小林由佳　三回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「九成宮醴泉銘祕書監撿校侍中鉅鹿郡公臣魏徵奉敕撰維貞觀六年孟夏之月皇帝避暑乎九成之宮此則隋之仁壽宮也……（略）」
九成宮醴泉銘は唐の時代の楷書の代表作です。九成宮は帝室の離宮で、唐の二代皇帝太宗が皇后と離宮を散歩中に偶然醴泉（甘味のある泉）を発見し、これを吉兆として記念碑（九成宮醴泉銘）を建立しました。写真は一部で、出品作品は一文字約三センチ四方、約四八〇字の細字作品となります。



63

近藤泰仁　三回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「飲之者痼皆癒然則神物之来寔扶」
酒飲む人はみんな痼り（しこり）がすぐとれて心が癒える、それすなわち神！みたいな文章やと思います（ガバガバ解釈）。酒飲むのは楽しいですけどやっぱりほどほどにしないとダメっすね。



64

近藤佑香　一回生
臨書　行書　王鐸『擬山園帖』　半切

「上下至。乖隔十八年。復得一集。且悲且慰。何指喩。嫂」
筆を旋回させるのが楽しかったです。五文字目と最後から二文字目が好きです。



65

坂本和歌子　一回生
臨書　草書　莫是龍『七言絶句幅』　半切

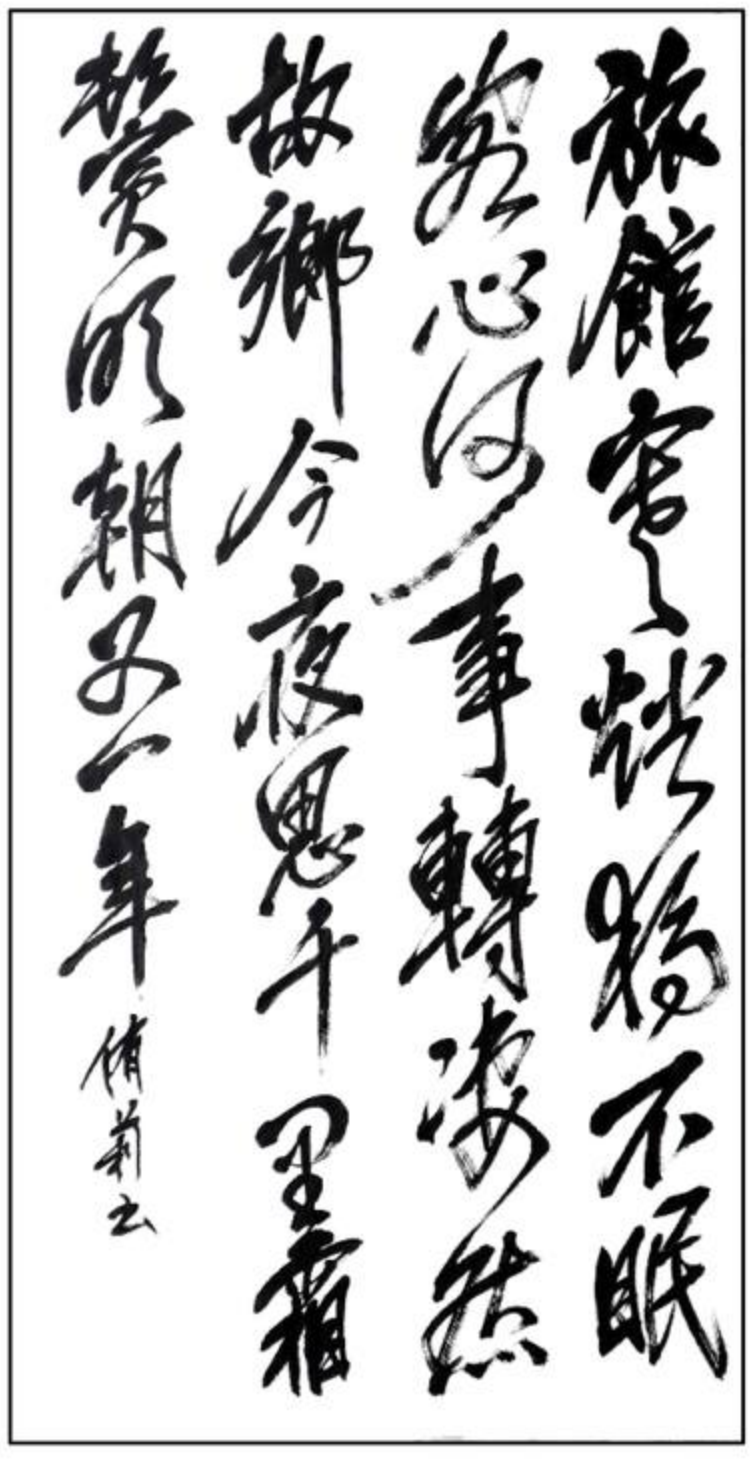
「天開洞壑両峰蟠地俯鮫宮六月寒君夫正逢秋色早平湖落木鏡中看」
クルクルした筆使いとサイズ感が難しかったです。特に一行目を半切に収めるのに苦労しましたが、書いていてすごく楽しかったです。



66

佐山侑莉　二回生
創作　行草書　『除夜作』　全紙

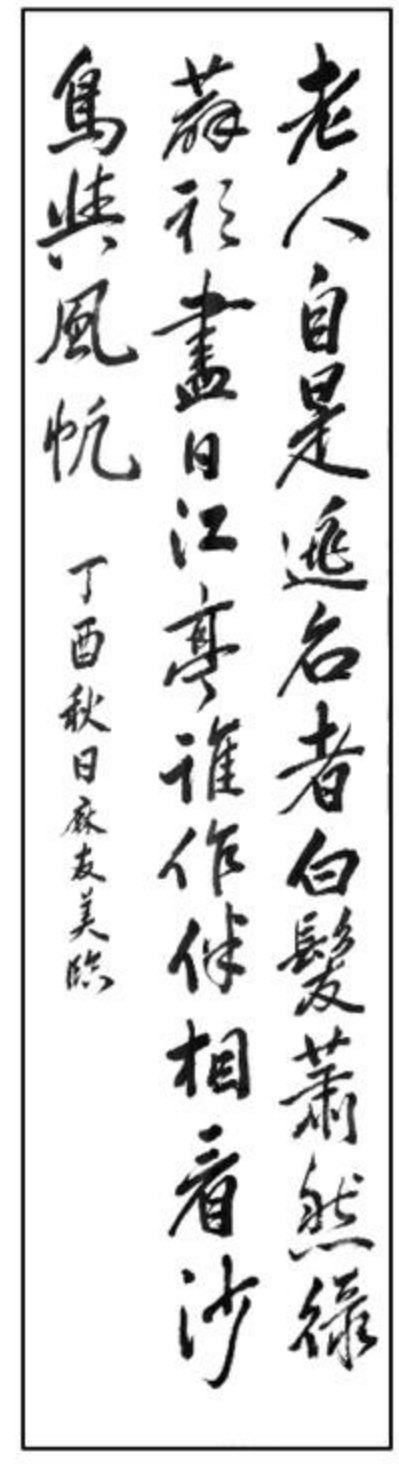
「旅館寒燈独不眠　客心何事轉凄然　故郷今夜思千里　霜鬢明朝又一年」
初めて全紙で創作しました。見せ場を作るのが難しかったです。



67

清水麻友美　四回生
臨書　行書　査昇『老懐』　半切

「老人自是逃名者白髪蕭然緑蓑尽日江亭誰作伴相看沙鳥興風帆」
同僚の憎しみを買った査昇が、仕事を辞め、故郷に帰った後に老後の境遇を詠んだものだそうです。



68

下坂桃代　四回生
創作　かな　『百人一首』　折帖

「ちは（八）やぶ（不）る　か（可）み（三）よも（毛）き（支）か（可）ず　龍田川　からくれ（連）な（奈）ゐに（尓）　水くくる（流）とは（八）」
気付けばもう四年。仮名に始まり仮名に終わった四年。やっぱり仮名が好き。



69

石博昭　修士二回生
創作　草書　『風任せ』　A4

「北風吹白雲　萬里渡河汾　心緒逢揺落　秋聲不可聞」
秋の寂寥を詠んだ詩。白雲が風に吹かれ、枯葉がひらひら舞い降りる様から、乾きの感を持たせた。また、普段等閑にする構成にも気を配った。飾り気のない拙作だが、目を留めていただければ幸いである。



70

建部壮一郎　二回生
臨書　楷書　作者不詳『牛橛造像記』　半切

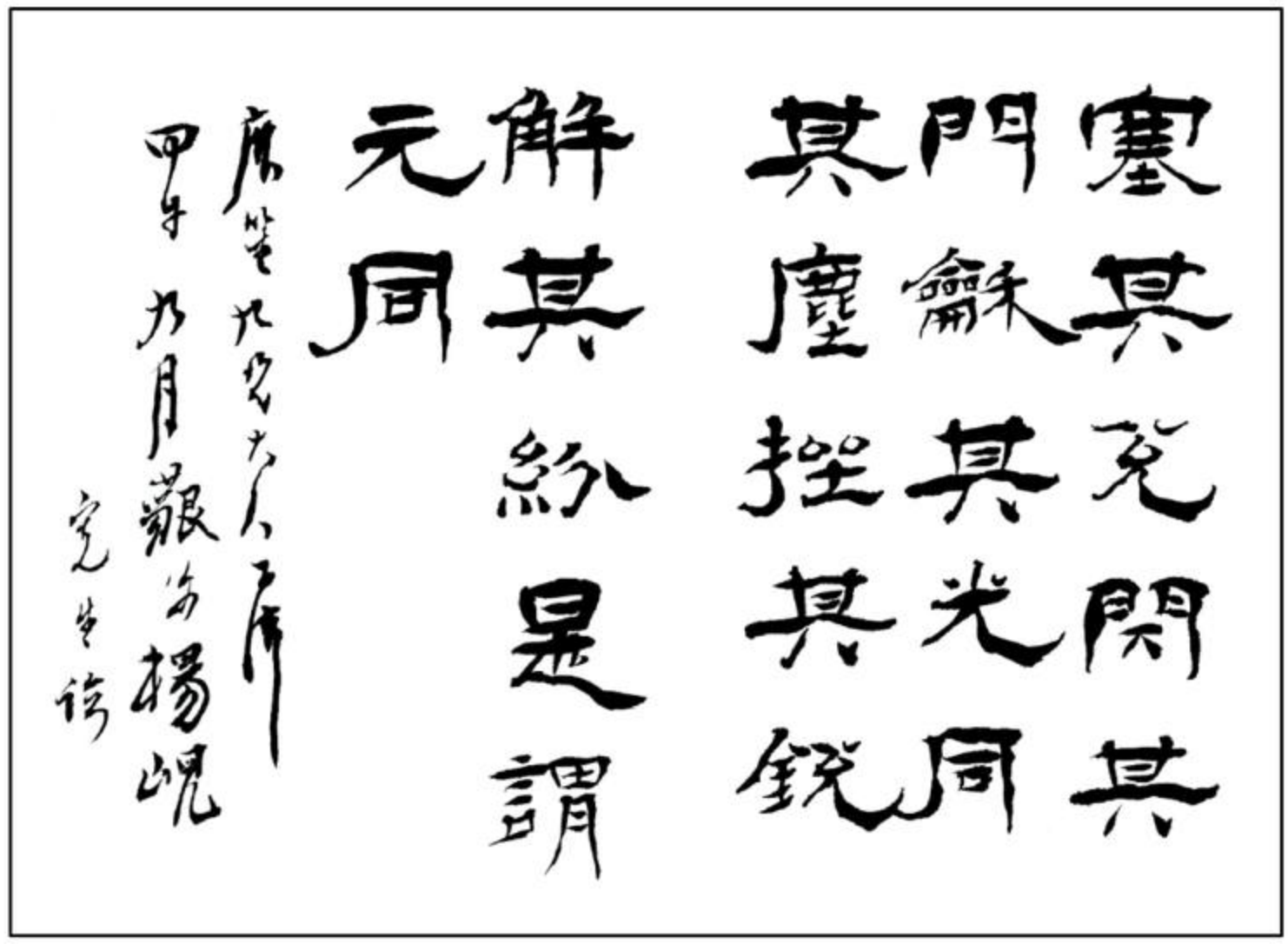
「穆陵亮夫人尉遅爲亡息牛橛」
力強い楷書を書きたいと思い、牛橛造像記を選びました。日常生活で楷書が使われ始めた南北朝時代の書です。初唐の三大家に代表されるような楷書に比べるとまだ未完成なのかもしれませんが、そうした未完成なところが却って私たちに趣を与えているようにも思えます。



71

徳田寛生　三回生
臨書　隷書　楊峴『隷書老子語紈扇』　大色紙

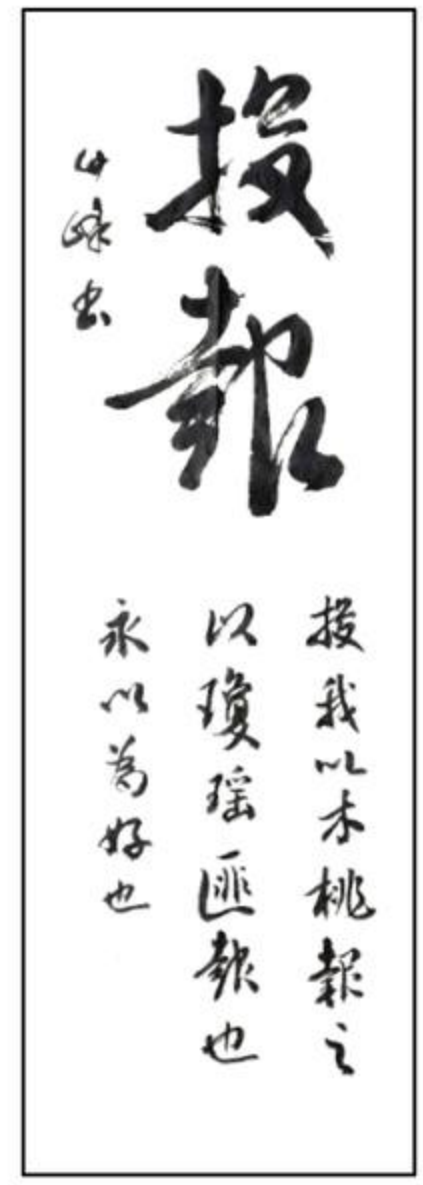
「塞其兌。閉其門。和其光。同其塵。挫其鋭。解其紛。是謂元同。」
最近忙しく練習不足気味ですが、楊峴は書いてて楽しいです。



72

仲村康太郎　三回生
創作　行書　『投報』　半切

「投報　投我以木桃　報之以瓊瑤　匪報也　永以爲好也。」
詩文は詩経の国風『木瓜』の第二連。詩経の詩は繰り返しが多く、三連からなる本詩も第二連の「桃」「瑤」が他の語に入れ替わるのみ。わざわざ第二連を採ったのは、第一連の「木瓜」の語より第二連の「木桃」の方が贈答返礼の場面として字面がいいと思ったから。題字・詩文・表装ともにクリスマス仕様、虽然我没有情人…。



73

仲村康太郎　三回生
創作　金文　『色色易賢。』　色紙

「色色易賢。」
『論語』学而篇に「賢賢易色」の語が見える。昨年の冬樟展でこの四字を色紙に書いたが、むしろ「賢」と「色」を入れ替えた方が自分にしっくりくる、そう思って書いたのが本作である。それぞれの書き下し方や意味の相違が衆人の気になる所であろうが、そこでつらつらと答えては野暮である、などと嘯いて私は答えない。



74

中村直樹　三回生

臨書　かな　伝小野道風『継色紙』　半切三分の一

「むめ（免）のか（可）の（能）ふ（布）り（利）お（於）くゆき（支）にうつりせ（勢）ば（盤）た（堂）れ（連）か（可）は（盤）ゝなをわきて（弓）おらましは（者）な（那）のいろは（盤）ゆ（遊）きに（尓）ま（万）が（可）ひ（悲）て（弓）みえ（盈）ず（春）とも（无）か（可）をだ（多）に（耳）ゝほ（本）へひ（悲）とのしる（流）べく（具）」

以前「寸松庵色紙」を臨書したときに残りの三色紙もやろうと思っていたので、今回この作品を選びました。色紙に散らし書きされた作品を書くのは久しぶりだったのでなかなか難しかったです。もっと練習しようと思います。



75

野田恵子　一回生

臨書　隷書　作者不詳『石門頌』　半切

「高祖受命興於漢中」

石門頌は摩崖（天然の岩崖）に刻まれたもので、一般の石碑よりも大きくどっしりとしているのが特徴です。飾り気がなくのんびりとした字形からは刻んだ作品の心のゆとりが感じられます。また波磔に見られる快活さ、「命」の縦線から伝わる芯の強さにも惹かれ、臨書することを決めました。



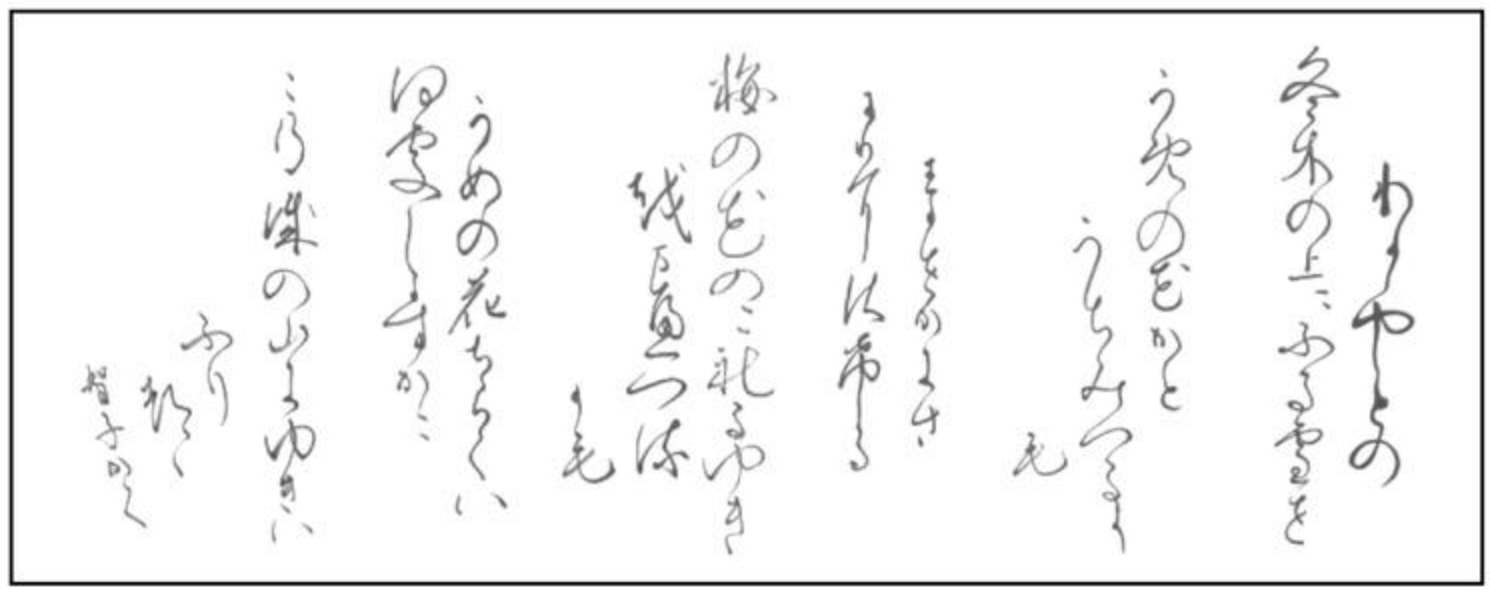
76

野田智子　二回生

創作　かな　『新春』　聯落横

「わか屋前の冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも　わが岳に盛りに咲ける梅の花残れる雪をまがえつるかも　梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ」

和歌を三首書きました。一首目は梅がこれから咲く様子、二首目は梅が儚く散っていく様子、三首目は梅が咲き乱れている様子、三首目は梅が儚く散っていく様子が書かれていますが、ぜひここから新春を感じていただければと思います。今はまだ梅の季節には早いですが、ぜひここから新春を感じていただければと思います。



77

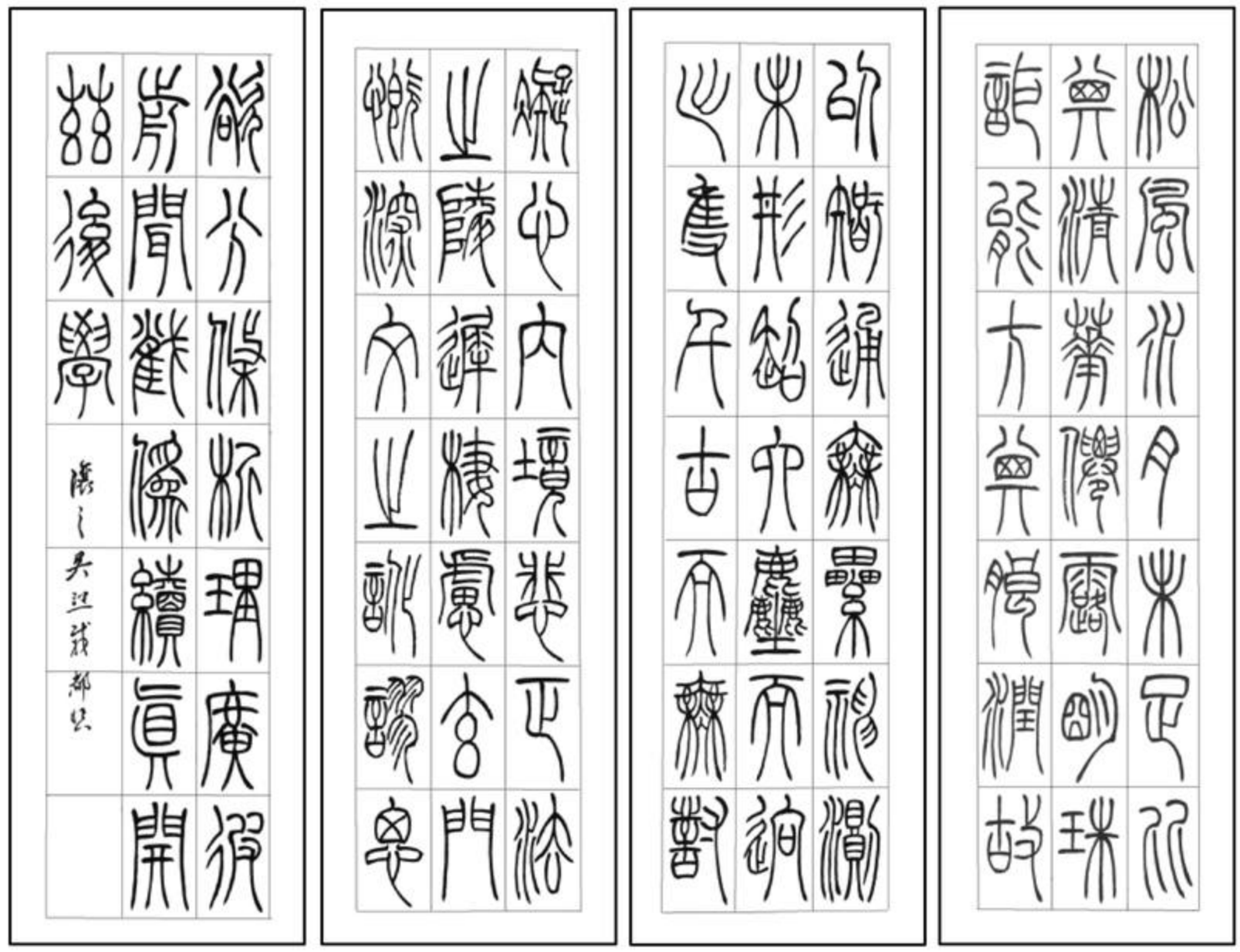
橋詰都　三回生

臨書　篆書　呉譲之『聖教序』　110cm×35cm　四連

「松風水月未足比其清華仙露明珠詎能方其朗潤。……（略）」

すっきりとした紙面を目指しました。筆で字を書く作品はこれで最後にするつもりです。

心残りはありません。



78

原誠人　三回生

創作　楷書　『衝動』　全紙

「衝動」

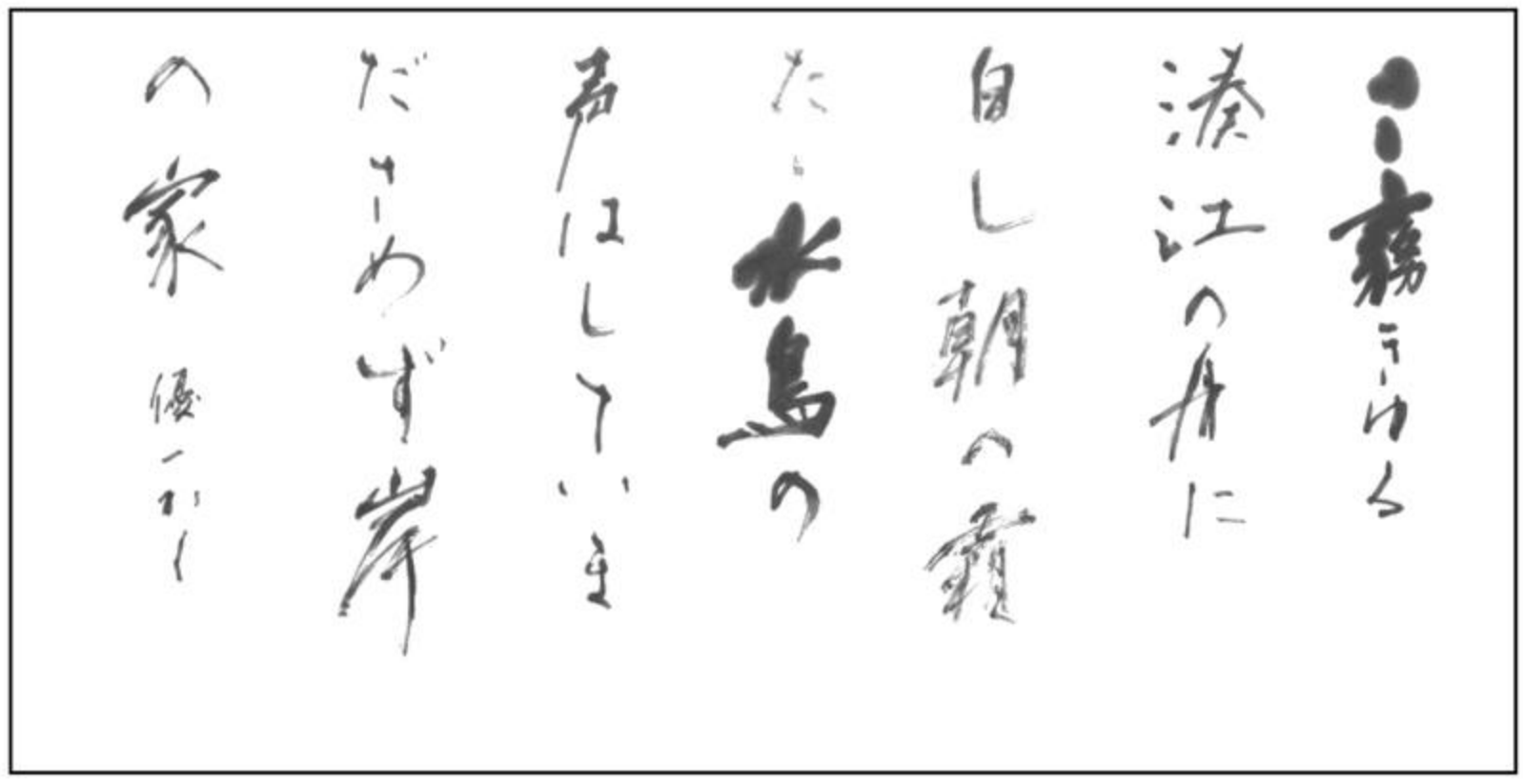
路上でドンとつき当たる「衝」、重いものに力を加えうごかす「動」。「衝(つ)き動かす」から派生して impulse——理性では抑え難い内的欲求——の定訳となった「衝動」。まず空海、次に王羲之を集字しましたが、改めて自身における「衝動」の……否、そんなことはどうでもいい！　もっと……そうだ、嗚呼、もっと……！



79

眞嶋優一　四回生
創作　調和体　『冬景色』　全紙横

「さ霧消ゆる湊江の　舟に白し朝の霜　ただ水鳥の声はして　いまだ覚めず岸の家」
唱歌　冬景色の一番の歌詞です。冬の朝の情景が美しい言葉の調べで描かれています。自然と共に生きた日本人が大切にしてきた四季の美しさを感じる心を持ち続けていきたいと思いこの題材にしました。



80

安田直記　一回生
臨書　行書　黄庭堅『松風閣』　半切

「依山築閣見平川夜闌箕斗挿我来名之意適然老松魁梧數百年斧斤所今參天風」
書道部に入って初めての書展作品です。できるだけ完コピ目指して頑張りましたが、完コピとは程遠い…。思い通りに線の揺らぎを出すのが難しかったです。



81

矢野凱己　四回生
創作　楷書・行書・隷書・篆書　『蝉』　半切四分の一　四連

「本以高難飽徒勞恨費聲五更疏欲斷一樹碧無情薄宦梗猶泛故園蕪已平煩君最相警我亦舉家清」
四年間の集大成。楷行隷篆それぞれ自分の好きな字体を揃えました。



82

山口和樹　四回生

創作　楷書　『竹聲松影』　半切横

「竹聲松影」

趙之謙の楷書に魅了されて、隷道にのめり込む日々が始まりました。四年間の集大成として、今回はその原点に戻ることにしました。趙之謙に感謝を込めて書き上げました。もちろん、書道部にも…。



83

吉岡智志　二回生

臨書　行書　米芾『蜀素帖』　半切

「好作新詩繼桑苧垂虹秋色滿東南」

今回、米芾を臨書しました。そこはかとない雰囲気の良さを感じてこの法帖を選びました。



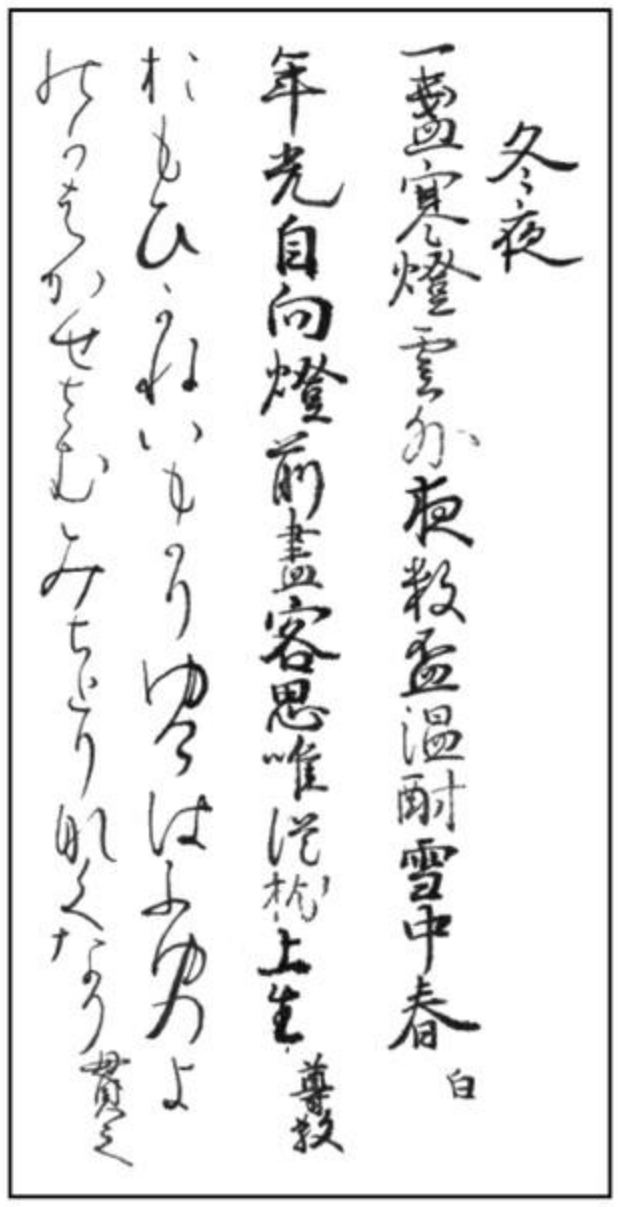
84

吉田凌祐　一回生

臨書　行書・かな　伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』　半懐紙

「冬夜　一盞寒燈雲外夜……（略）　おもひかね……（略）」

粘葉本和漢朗詠集より、四季の夜を選んで書いている、第二段の作品です。季節に合わせて、今回は冬夜です。日も短くなり、風も冷たくなって、外に出るのが億劫になる季節ですが、その中にある風情を感じてみるのもいいと思います。



85

渡辺顕　四回生
創作　楷書　『倜儻不羈』　115cm×35cm

「倜儻不羈」
「てきとうふき」「倜」拘束されないこと「儻」ぬきんでていること「羈」馬を制する手綱



87

笠原知生　四回生　・　山科直也　四回生
創作　行書・隷書　『維新一焦心録後に題す』　半切

「維新　内憂外患迫吾州……（略）」
高杉晋作が明治維新の激動の時代に自身の家や国のために粉骨砕身する決意を書いた漢詩。今年卒業する笠原の決意を重ね合わせて表現した（という設定の）作品です。



86

阿部朱夏　三回生　・　山崎夏野　四回生
創作　調和体　『ヒトボシ』　A4横　二連

「どうせ小さな光なんだ 言われなくたって知ってるんだ たまに夜空の星屑たちに 勇気をもらってもいいだろう／どうせ小さな光なんだ 言われなくたって知ってるんだ だからこうして手を取るんだ 少しでも空から見えるようにと」
RADWIMPS に魅せられたふたりが書きました。「おかずのごはん」のデザートに是非。





88

中村勇真　二回生　・　平井達也　二回生
創作　行草書・隷書　『楓橋夜泊』　聯落

「憂愁　月落烏啼霜満天江楓漁火対愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘声到客船」
この詩は、張継が科挙に落第したときに詠まれたものと言われています。私たち二人も大学受験に失敗したときのことを思い出して、作品を制作しました。書道も人生も、失敗を糧にして前進していきたいと思います。



【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科教授　宇佐美文理
京都大学人文科学研究所図書掛　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書道家　寺本蒼玄

一回生

文　石本森羅
工　市川拓真
工　鵜川大輝
文　牛田聡実
法　大橋葵
農　小池莉穂
工　越田真由
同志社　近藤佑香
法　坂本和歌子
同志社　中岡大吉
工　中林亮
同志社　野田恵子
工　松尾有輝也
工　安田直記
法　湯宮颯太
理　吉田凌祐

二回生

法　安達光寿
工　覚道直治
京学　勝野初紀
法　金岡杏祐
工　金山優作
京薬　鬼頭由里香
工　金祺民
工　邢書禹
医　佐山侑莉
法　建部壮一郎
理　中村勇真
医　野田智子
文　挾間優美
工　一二暉生
文　平井達也
法　村上友梨
京女　森ちひろ
工　山本理恵子
農　吉岡智志

三回生

工　阿部朱夏
医　今村朱里
法　上村香鈴
医　浦川真由子
法　小野日菜乃
教育　神﨑七海
工　木上博之
工　郡健一郎
農　小林由佳
法　米田景
工　近藤泰仁
農　阪井田有紗
文　佐武千寛
工　角裕介
文　橘大輝
法　徳田寛生
文　仲村康太郎
文　中村直樹
工　橋詰都
理　原誠人
工　原田拓実
同志社　平野晶子
総人　エミリー

四回生

造形　大池ららる
医　岡本晴香
経済　笠原知生
府医　木高早紀
農　木下有羽
医　小森千裕
法　清水麻友美
医　下坂桃代
薬　竹内春佳
総人　深谷拓未
農　堀場菜摘
造形　眞嶋優一
法　三村祐貴子
工　宮部大志
工　矢野凱己
工　山口和樹
農　山崎夏野
工　山科直也
工　渡辺顕
工　ハンナ

五回生

法　山崎絢香

七回生

総人　平野泰隆

修士一回生

農　新井一矢
薬　荒巻拓哉
理　上西隆太
工　牛山泰喜
工　闇姝恒
工　角谷遊野
農　釜阪紘平
工　藏岡凌平
大教　島津七明
工　白谷暢浩
工　宗哲仁
理　疋田研一郎
農　方伯軒
農　柳本圭介
人環　山脇謙

修士二回生

法　大石龍太
農　片野裕太
工　河合翼
経済　柯潔
工　石博昭
農　中谷百花
情報　藤田雄也
農　家倉凌

修士三回生

情報　鈴木貴也

博士一回生

法　大泉陽輔
医　川上澄香

博士課程修了

地環　藤井基弘

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ http://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町３７
TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島 5-14-6 クレセントビル 2F
TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 164
TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802
書遊松島堂 〒320-0058 栃木県宇都宮市上戸祭 3-2-25
TEL.028-678-6705／ FAX.028-678-6551
札幌アメミヤ店 〒060-0061 札幌市中央区南一条西２丁目５南一条 Kビル5F
TEL.011-398-9400／ FAX.011-398-9401

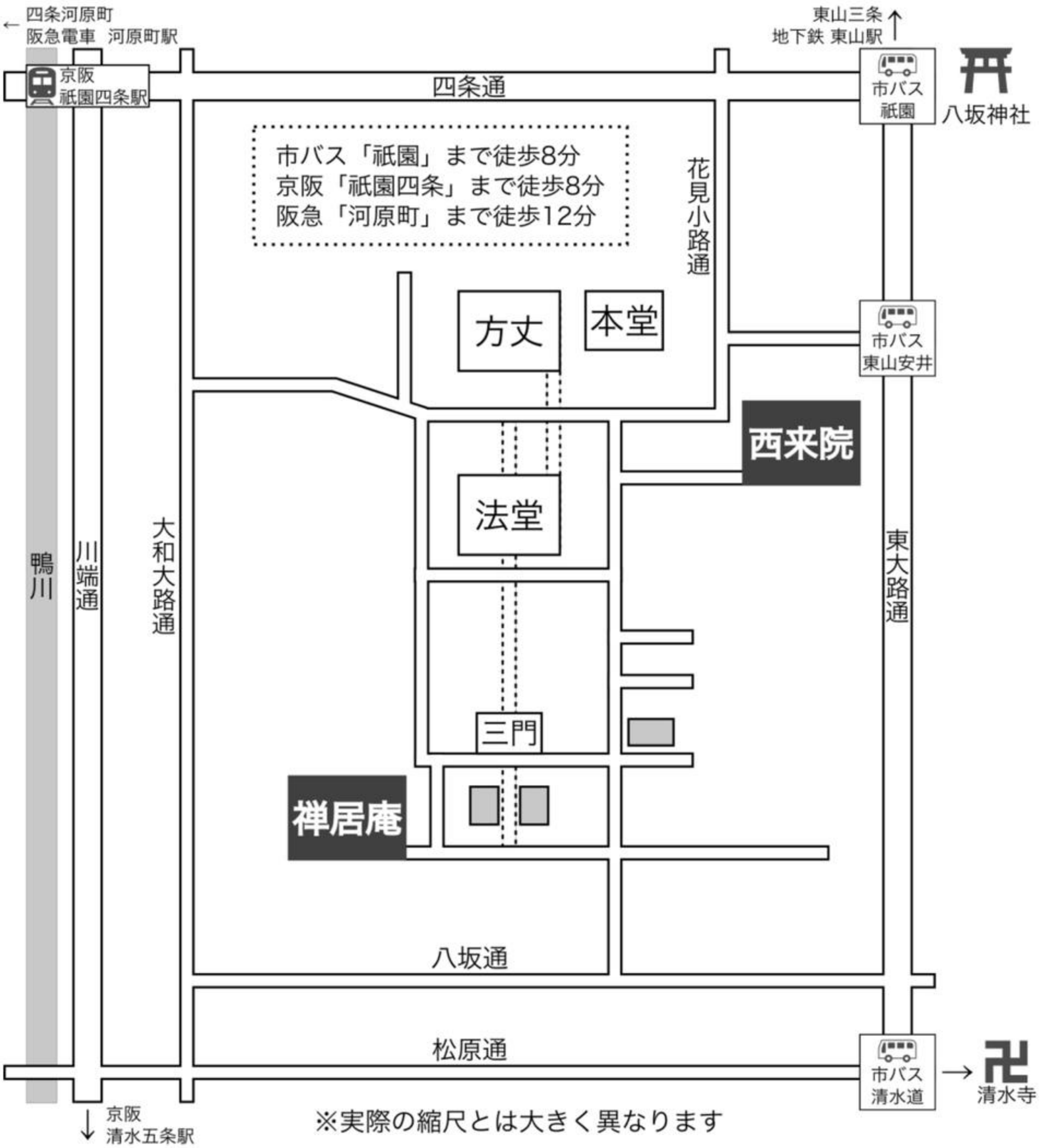
筆・墨・硯・書画用紙・色紙短冊・日本画用具
株式会社 松楳園
〒600-8075 京都市下京区柳馬場通仏光寺下ル
TEL（075）351－6380(代)
FAX（075）361－8006
http://www.shoubaien.co.jp.

香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路
上ル下本能寺前町 520
営業時間 10～18 時 定休日(日曜日)
TEL. 075(231)0510 FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車 5 番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

京筆・京文房
りゅうしどう
龍楊堂
京都 〒604-0916 京都市中京区寺町通二条上ル
TEL.075-252-4120 FAX.075-252-0006
東京 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋四丁目六の二
東洋美術印刷本社ビル一階
TEL.03-3239-0733 FAX.03-3239-0731

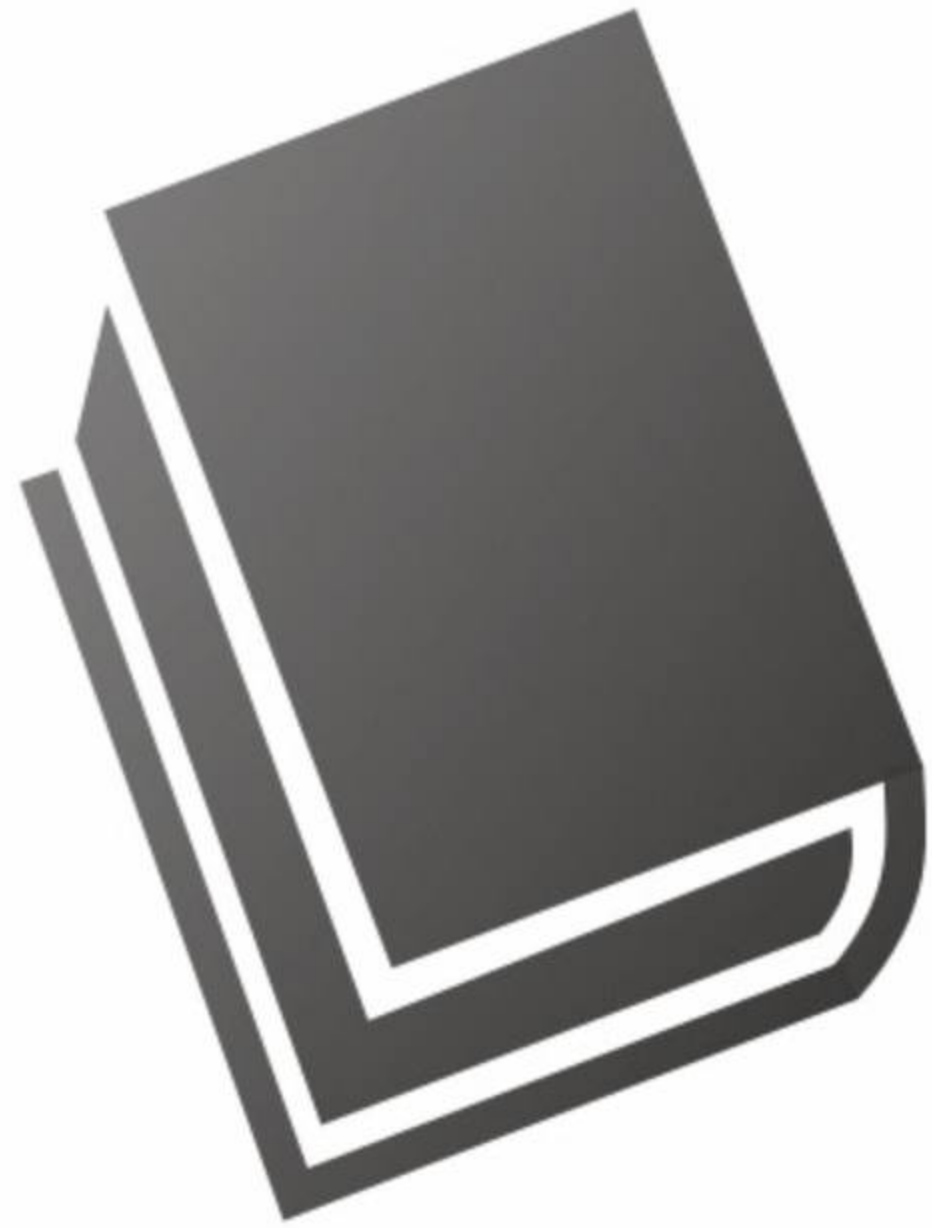
文具四寶 (筆・墨・硯・紙) 和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
URL：http://www.shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME